

159
0-61
2

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10^{cm} 11 12 13 14 15

始



25.11.17

外567

二

~~376~~ 15

159
0.61
2

大町桂月著



此處に道あり



東京星文館發行

序

『木を切りて道を開きて行く山の七八町に小半日かな、これ余が磐城の旭岳に登りて作れる所也。旭岳には道なし。余之に登りて、つくづく道ある山を難有く思ひぬ。旭岳に道は無かりしも、幸に導者のあるありて、無事に登降することを得たりき。道なき山に、案内者もなく、而かも濃霧襲ひ來りて咫尺辨せず、風雨も加はりて、霽れざること數日に及ばず、登らむとしても登られず、降らむとしても降られず、饑凍交もく至りて、終に困死するかも圖られざる也。余は更に顧みて、人生を聯想せざるを得ず。人は歩くに道を要するが如く、活くるにも道を要す。才に任かせ、

氣に任かせて、道なき山に入りて、一時は無事に通過すとも、必ず終には行詰まるべし。殊に年若き人は空想に驅られ、外來の新思想にそゝられて、道なき山に迷ひ込みて、困難窮死するもの少なからず。畢竟するに、これ人に頭あるを知つて、足あるを忘れたる也。人は一日も頭なかるべからず。即ち智能なかるべからず。されど一方に足なかるべからず。即ち正道を踏まざるべからず。若しも頭あつて足なくんば、これ幽靈也。幽靈ならば、深夜墓邊に出づべし。白日青天の下、人世の巷に出しやばるべきに非ず。人動もすれば曰く、「古臭きに堪へず」と。なるほど、舊を嫌ひ、新を喜ぶは、人情の常也。されど、能く新舊の遣ひ分けを

考へざるべからず。知識は日に／＼新しきを要するが、人の蹈みゆく道は、萬人に通じ、古今に亘りて戻らざるまで、古くより確定せるものならざるべからず。苟くも紳士たらむ者はこそ／＼と陋巷をうろつかずに大道を闊歩せざるべからず。余こゝに感ずる所あり。日本國民一般に闊歩すべき大道を求めて、安らかに、快く、正々堂々として人生に闊歩せむことを期するもの也。

大正六年秋

大町桂月

此處に道あり目次

總論

一、處世の根本……………	一
二、仁とは何ぞや……………	五
三、義とは何ぞや……………	一三
四、禮とは何ぞや……………	一六
五、智とは何ぞや……………	一九
六、信とは何ぞや……………	二三
七、五倫と實行……………	二五

目次

仁

- 一、理想の我と現實の我……………二八
- 二、この重きものに就け……………三六
- 三、浮世の迷兒となること勿れ……………四三
- 四、君子は憐れみ小人は戀る……………五二
- 五、この腹藝を學べ……………六二
- 六、己れを憤らざるべからず……………七五
- 七、理窟で人格はつくられず……………八一
- 八、未來に生活するものは誰ぞ……………八七
- 九、人道は自然の征服に在り……………九七
- 十、牛馬すら妄りに鞭撻すべからず……………一〇五

義

- 一、勇氣は刺撃によりて生ず……………一一三
- 二、意義ある活動……………一一八
- 三、人の品性を判ずる試金石……………一二四
- 四、天を畏るゝの人たれ……………一二八
- 五、この瘦我慢の趣味を解すべし……………一三五
- 六、勝負に負けても角力に勝て……………一四一
- 七、人の迷惑を顧みよ……………一四八
- 八、義は勇によりて行はる……………一五三
- 九、社會は孤立的のものに非ず……………一六五
- 十、制裁力を振起すべし……………一七二

禮

- 一、禮は玉帛の謂にあらず……………一八八
- 二、己れに克つの道……………一九二
- 三、日本の紳士道を作興すべし……………一九九
- 四、共通の快樂を要す……………二〇五
- 五、新興國民たるの襟度……………二一一
- 六、交友と交際の第一要義……………二一七
- 七、人を侮るは自から侮る也……………二二三
- 八、徒らに習慣に囚はるゝ勿れ……………二二八
- 九、自己を標準とすべからず……………二三四
- 十、膽大心小なるべし……………二四〇

智

- 一、心の化粧……………二五〇
- 二、健闘に必要な二大武器……………二五七
- 三、われは馬に學ばんかな……………二六五
- 四、青年の一大難關……………二七三
- 五、文字に讀まるゝ莫れ……………二七九
- 六、中流人士の一武器……………二八七
- 七、學問の要は虚心を尊ぶ……………二九六
- 八、人間最高の快樂……………三〇二
- 九、霜をふんで堅氷いたる……………三一二
- 十、活社會に飛躍するの準備……………三三〇

信

目次

一、われ我を欺くべからず……………三二八

二、人は希望に活くべし……………三三四

三、浮世の旅の心得……………三四二

四、確信の出づる所……………三四九

五、先づ自己を知るに在り……………三五三

六、強みある親切……………三六〇

七、文章は手先のみ業にあらざ……………三六八

八、言ふは易く行ふは難し……………三七四

九、家庭は休息場にあらざ……………三七九

十、苦を樂に轉ずる方法……………三八六

目次終

此處に道あり

大町桂月著



總論

一 處世の根本

『世に立つには先づ人として修養せざるべからず』と云は、人或は云はむ、『この世智幸き世の中に人として修養し居りては間に合はざるべし』と。又或は云はむ、『この黄金萬能の世の中に人として修養し居りては、人間の干物が出来るべし』と。又或は云はむ、『この知識進み科學發達して生存競争甚しき世の中に人として修養し居りては、社會の落

處世の根本

伍者となるべし』と。いづれも餘りに淺き見方也。古人も『淵に臨んで魚を羨むは、退いて網を結ぶに若かず』と云へるに非ずや。人としての修養を外所にして立身處世の道を講ずる者は、網を持たずして、魚を手攫にせむとする也。金よ／＼とあせるのみにて金を得ず、成功々々と騒ぐのみにて、成功せず、時に小金を得るも、大金を得ず。小さく成功するも、大きく成功せず。又時に大金を得るかと思へば、忽ち之を失ひ、大に成功するかと思へば、忽ち失敗す。小才ある者は却つて小才の爲めに身を誤り、姦智に長けたる者は誤魔化して世を渡らむとするも、誤魔化し切れずして、社會の罪人となるもの少からず。いづれも人としての修養を外所にしたるの致す所也。

さらば如何にして、人としての修養を爲すを得べきか。その方法一にして足らざるが先づ『仁義禮智信を體得せよ』と云は、人或は云はむ

『古臭き儒教を昇ぎ出したればとて、二十世紀の世の中には役立たず』と。これが抑もの誤解也。知識は新しきを便とすれども、道義は古きが健全也。儒教はもと支那に起りたれども、日本に實行せられたり。なほ基督教の小亞細亞に起りて、歐米に實行せられたるが如し。儒教が古しとならば、基督教も古し。その他道義はすべてみな古きもの也。長き經驗に掛けて、國民の性情風俗に適合せるもの、その國民の道義となる。知識を麥酒とすれば、道義は葡萄酒也。麥酒は新しきに限れど、葡萄酒は古ければ古きほど價を生ず。この區別を知らずして、唯自ら新人と稱して、新しき道を踏まむとするものあれど、これなほ道路を外所にして、草莽荆棘の中を行くが如し。行くには行けても、路拂らず。時には『とげ』に刺さることあるべく、時には蛇に噛まれることあるべく、時には絶壁に行當りて上る能はざるべく、時には溝壑に陥ることあるべし。要するに

新舊の用を取違へたる也。

斯く説き來らば人或は云はむ、「知識は人に先んずるが價値あれど道義は舊型に據りて世と合するが健全也。さるにても人としての修養が仁義禮智信だけにては少きに失せずや」と。請ふ世界三聖と云はるゝ人の説く所を聽け。釋迦の力説する所は慈悲基督は愛孔子は仁の一語に非ずや。すべて物事は末になるほど多岐多端也。多岐多端に没頭しては源泉に達し難し。孔子は仁の一語だけにて大道を總括したりし也。孟子は義を加へて仁義と云へり。漢の世になりて仁義禮智信を五倫と云へり。馬琴は其八犬傳に於てこの五倫に忠孝悌を加へて八倫とし之を一々八犬士に配せり。フランクリンは節制沈黙規律決心儉約勤勉至誠正義中庸清潔平靜潔行謙遜を以て十三徳とせり。元田永孚は明治天皇の御旨を奉じて『幼學綱要』を編みけるがその書には孝行忠節和順

友愛信義勤學立志誠實仁慈禮讓儉素忍耐貞操廉潔敏智剛勇公平度量識斷勉職の二十目を立てたり。目を立てむとすればこの外になほ多かるべけれど根本を捉へて綱を定めむとすれば孔子の仁にて可也。孟子の仁義にて可也。世間一般に知られたる仁義禮智信の五倫ならば決して少しとせず。道義の根本一目瞭然たらずんばあらざる也。

二 仁とは何ぞや

仁とは何ぞや。先づ辭典を見るに、いろ／＼の意味あり。第一親愛する事第二己を推して人に及ぼす事第三恩徳の他に及ぶ事第四利潤の他に及ぶ事第五百姓を安んじ民人を濟ふ事第六品性うるはしき事第七事理に通達したる事第八倫理の事第九徳性の事第十人格完成の事第十一

仁とは何ぞや

仁とは何ぞや

至大なる道義の事第十二篇實なる習慣の事第十三理の原にして萬事の善なる事など也。次に孔子は如何に仁を説きたるかと見るに、

- 一、巧言令色鮮い哉仁。
- 二、孝弟は其れ仁を爲すの本か。
- 三、不仁者は以て久しく約に處るべからず。以て長く樂に處るべからず。仁者は仁に安んじ、知者は仁を利とす。
- 四、唯仁者は能く人を好み、能く人を惡む。
- 五、苟くも仁に志せば、惡きこと無し。
- 六、仁を好む者は以て之に尙ふる無し。不仁を惡む者は其れ仁を爲す。不仁をして其身に加へしめず。
- 七、仁は難きを先にして獲ることを後にす。
- 八、仁者は己れ立たんと欲して人を立て、己れ達せむと欲して人を

達す。

九、顔淵仁を問ひしに、孔子答へて曰く、己れに克ちて禮に復るを仁と爲す。

一〇、仲弓仁を問ひしに、孔子答へて曰く、仁者は門を出て、は大賓を見るが如くし、民を使ふは大祭を承くるが如くし、己れの欲せざる所は、人に施すこと勿れ。邦に在りても怨みなく、家に在りても怨みなし。

一一、樊遲仁を問ひしに、孔子答へて曰く、人を愛せよ。

一二、樊遲また仁を問ひしに、孔子答へて曰く、居處するに恭しく、事を執りて敬み、人と與にして忠ならば、夷狄に之くと雖も棄つべからざるなり。

一三、剛毅木訥は仁に近し。

仁とは何ぞや

仁とは何ぞや

一四、仁者は必ず勇あり。勇ある者必ずしも仁あらず。

一五、君子にして不仁なる者あり。未だ小人にして仁なる者あらざるなり。

一六、志士仁人は仁を求めて仁を害すること無し。身を殺して仁を成すことあり。

一七、恭寛信敏惠の五者を行ふを仁と爲す。恭なれば則ち侮られず。寛なれば則ち衆を得。信なれば則ち人任す。敏なれば則ち功あり。惠なれば則ち以て人を使ふに足る。

一八、仁を好みて學を好まざれば其蔽や愚。

孔子が仁を説くこと大略右の如し。あまり廣過ぎて捕捉し難けれども、まづ、韓退之の説けるが如く、『博く愛する之を仁と謂ふ』と心得て可なるべし。君を愛すれば忠となり、親を愛すれば孝となり、國を愛す

れば愛國者となる。すべて人に對して『思ひやり』あり。『思ひやり』が有り過ぎて所謂『お人好し』になり、『宋襄の仁』になりても困れど、全く『思ひやり』の無きは人としての第一の資格を缺きて、動物の域に墮せる也。尾崎行雄氏が西郷隆盛論の一節に云へるあり。

曾て東京市立養育院を巡視す。收容する所は皆是れ貧苦にして自立すること能はざる者に係るといへども、熟ら其狀を視るに、富貴の相を具へて爾く貧困なるべからざるもの間々之あり。之を當局者に問ふに、果然彼等の中には高等官の職に在りしものあり。巨萬の富を擁せしものあり。然るに不期の變に遭ふに方りて、直に養育院中の人となるは、榮枯の變化亦激しからずや。人各親屬あり。故舊あり。艱難相濟ひ、變災相弔して、容易く凍餓の太甚しきに至らず。此輩にして獨り艱難を濟ひ、變災を弔する親屬故舊なしといふは、頗

仁とは何ぞや

仁とは何ぞや

る奇とすべし。是に於てか以爲へらく墮落この極に及ぶものは、其身に固有の癖性ありて、自ら不幸を招致するにあらざるなきを得んやと。乃ち卒然として當局者に問うて曰く、入院者中の一般に通ずる特質なるものなからむや。若し之あらば、願はくは與り聞くことを得むと。余は卒然として疑問を發したれども、翻つて余以爲へらく、是れ蓋し深慮を要すべき大問題なり。當局者も經驗に豊かなるを以てするも、或は直に答へ難からむと。而も當局者は聲に應じて對へて曰く、然り、間々之あり。他人に對して同情を缺き、毫も自ら制抑すること能はざるもの、即ち一般に通ずるの癖性なりと。余は其應答の甚だ速なるに驚くと共に、一種の感興は油然として湧けり。

他人に對して同情を缺き、而して自ら制抑すること能はざるものは養

育院の厄介となるの外なし。到底世に成功すべくもあらざる也。仁といふ字を解剖して見よ。人に從ひ、二に從ふ。即ち人が二つある也。人が一人ならば、同情の要なし。二人となれば、必ず同情を要す。同情ありて始めて家あり、村あり、國あり。彼我相益し、相救ひて、人は安全に生活し、且つ安全に發達するもの也。仁を解するものは、榮え仁を解せざるものは亡ぶ。これくらゐの道理は何人も之を解せざるは無かるべけれども、いよゝ實行の段となれば、或は慾に迷ひ、名に誘はれて、不仁の行ひを爲すもの多し、一時不仁を爲して、無事に通過し、否却つて利益を得得々たるは、これなほ空氣の目に見えざるを以て、空氣なしと思ふに同じ。況して不仁が積りて、不仁の札付となりては、何人も相手にせざるべし。利のある間は相手にするも、利つくれば、棄て、顧みざるべし。敬して遠ざけらるべし。鼻抓みにせらるべし。なほ鼠のこそゝと生活するに同じ。

仁とは何ぞや

仁とは何ぞや
實に生甲斐のなき人也。

孔子は仁を力説したるが、殊に爲政者更に進んで救世主の仁を力説せり。これ仁の大なるもの也。普通の國民は先づ個人としての仁者ならざるべからず。人を愛せざるべからず。世人往々以爲へらく、「世に生活するには、こすく立廻らざるべからず。仁を志して居れば、自滅の外なし」と。これ仁を誤解せるもの也。正當の利を得ることは決して不仁に非ず。又無暗に人に恵むことが仁に非ず。いよ／＼金錢より外に救濟の道なき場合には、金錢を以て恵むべきも、成るべく人を慰め、且つ勵まして能力を得させ、働くを得させるが、眞の仁也。子供をちやほやし過ぐるが必ずしも仁に非ず。能く愛し能く教へ、能く戒むるが眞の仁也。苟くも仁の本意を解すれば、己れも榮ゆれば、人も榮ゆ。豈に自滅するものならむや。仁なればとて、迂濶なるものに非ず。こすく立廻るべきにこ

すく立廻りたればとて、それが必ずしも仁と衝突するものに非ず。唯不正の手段を爲して、一時の利を博せむとするは、仁者の事にあらざるのみならず、實業家として劣策也。よしや一時を苟偷すとも、決して永久に榮えざるべき也。

三 義とは何ぞや

義とは何ぞや。先づ辭典を見るに、いろ／＼の意味あり。第一進退動作の禮節に適ふ事、第二裁制其宜しきを得る事、第三人の踏み行ふべき正しき條理の事、第四筋道正しき事、第五徳惠の事、第六職分の事、第七他の急を濟ふ事、第八至行の人に過ぐる事など也。次に孔子は如何に義を説きたるかと見るに、

義とは何ぞや

禮とは何ぞや

- 一、信義に近ければ言復むべきなり。
- 二、君子は義に喻り、小人は利に喻る。
- 三、忠信を主とし義に従るは徳を崇くするなり。
- 四、上義を好めば則ち民敢て服せざる無し。
- 五、利を見ては義を思ひ危きを見ては命を授け久要に平生の言を忘れずんば亦以て成人と爲すべし。
- 六、群居終日言義に及ばず好みて不惠を行ふ。難い哉。
- 七、君子は義以て質と爲し、禮以て之を行ひ、孫以て之を出し、信以て之を成す。
- 八、君子は義を以て上と爲す。君子勇ありて義なければ亂を爲す。小人勇ありて義なければ盜を爲す。
- 九、義を見て爲さざるは勇なきなり。

孔子が義を説くこと大略右の如し。義の真意も一寸捕捉し難けれど、韓退之の『行ふて之を宜しくする之を義といふ』と解釋すれば、義の要を得たるもの也。今上陛下が國民に向つて宣給へる御詞に『義は則ち君臣にして、情は猶は父子のごとく』とあり。これ實に我國體の精粹を道破し給へり。忠を盡すは臣の義也。孝を盡すは子の義也。如何に金が入用なればとて不正の金を取るは不義也。正當の金を取るは義也。情は盲目也。善き事もあれば悪き事もあり。義之に加はりて正しき情ともなり、正しき道ともなる。義は理性に發して信念に遂ぐ。とにかくに私心を離れたる也。赤穂四十七士を忠臣と云へば忠臣也。義士と云へば義士也。義侠の語あり。義憤の語あり。義の字を解剖すれば、羊に従ひ、我に従ふ。即ち我を羊にする也。我を犠牲にする也。我をして道に従はしむる也、『小我』の心餘りに強く、餘りに氣隨氣儘にして、餘りに

義とは何ぞや

利己的にして、理性暗くしてぐずぐずなれば、義は行へざるべく、従つて人より度外視せられて、到底世に立ち榮ゆべくもあらざる也。

四 禮とは何ぞや

禮とは何ぞや。先づ辭典を視るに、第一人の履み行ふべき秩序品節の事、第二敬意を表する事、第三敬意を表する爲めに贈る物、第四敬意を表する爲めに行ふ式など也。次に孔子は如何に禮を説きたるかと見るに、

- 一、恭禮に近ければ、恥辱に遠ざかるなり。
- 二、生ける時は之に事ふるに禮を以てし、死しては之を葬るに禮を以てし、之を祭るに禮を以てす。
- 三、林放禮の本を問ひしに、孔子曰く、禮は其奢らむよりは寧ろ儉

なれ。

- 四、君に事へて禮を盡せば、人にて諂へりと爲すなり。
- 五、君臣を使ふに禮を以てし、臣君に事ふるに忠を以てす。
- 六、勇にして禮なき者を惡む。
- 七、禮を知らざれば、以て立つことなきなり。

孔子の禮を説くこと、大略右の如し。禮の語は、禮樂と熟し、禮儀と熟し、禮節と熟し、禮讓とも熟す。謹み敬ふ心内に在り、うやくしき行外に發し、人に不快の感を與へざるが禮の根本也。人を侮り人を馬鹿にして横柄に振舞ふは、禮を知らざる者也。禮の末節は國により處によりて、それく異なるものにて、禮を盡したりと思ひても、案外無禮なることあり。また我に無禮を加へたりと思ひても、案外我に禮を盡したることもあり。能く注意せざるべからず。世にはひよこく頭をさげ、お世辭をふ

りまきて、それにて禮の能事畢れりと思ふものあれども、媚ぶるが禮には非ず。角張り過ぎて親愛の意を失ふも禮に非ず。とかく世慣れぬ人は、いきなりなる書生流義を振りまはして、知らずく禮を失ふことあり。又親友に對する態度を他に移して傲慢に思はるゝことあり。爲めに世に處する上に失敗すること少なからず、さは云へ、一ト通り常識を備へて、よく敬ふべきを敬ふことを解し、さへすれば、大なる失敗は無かるべし。人に不快の感を與ふるは禮にあらざれば、禮をつくすには、辛抱が大切也。痛ければ直に泣き、苦しければ直に愚痴を溢すやうな弱蟲にては不可也。何かと云へば直に喧嘩腰になる人にては不可也。溫和重厚の氣あるものは禮に適するのみならず、立身出世にも適する也。

五 智とは何ぞや

智とは何ぞや。先づ辭典を見るに、第一物事を明かに知る事、第二物事を明かに知り得る能力の事、第三悟り早き事、第四巧術の事など也。次に孔子は如何に智を説きたるかを見るに、

- 一、知を好みて學を好まざれば、其弊や蕩。
- 二、君子は一言以て知となり、一言以て不知となる。言慎まざるべからざるなり。
- 三、言を知らざれば、以て人を知るることなきなり。
- 四、唯上知と下愚とは移らず。

孔子の智を説くこと、大略右の如し。孔子は所謂ゆる智巧を説かず、良智は孔子の仁の中に含まる。智を仁より離して云へば、頭の働の明敏な

ること也。技能に達するにも、事務に處するにも、一身を修むるにも、一家を齊ふるにも、人の爲すことは、すべてみな智を要せざるは無し。智深ければ、何事にも深く達し、智大なれば、何事も大きく成る。智ある人民は開化人にして、智なき人民は野蠻人也。十九世紀以來、物質文明の進歩殊に著しく、空に飛行機飛び、海底に潜航艇走る世の中、戦争も智と智との比べあひ也。平和の戦争は猶更然り。智の必要なること、今更言ふまでもなけれど、智と才との區別、智慧と知識との區別、良智と姦智との區別などに就いて、一寸辯ぜざるべからず。智が進めば良智となるべきものにて、智と云へば、良智の事なる筈なるが、修養せざる人に在りては、慾に迷ひ、利に誘はれて、悪と知りつゝ、悪計を爲すものあり。之を姦智と稱す。同じく正宗の名刀なるが、之を用ゐて君の爲めに戦へば忠勇の臣となり、之を用ゐて強盜を爲せば罪人となる。智も正道に用ゐれば良智となり、邪道

に用ゐれば姦智となる。一寸考へれば危険なるやうなるが、智が進まざればこそ邪道に陥るなれ。進めば邪道に陥ることなし。管に邪道に陥らざるのみならず、善事善行を爲す。人は良智だにあれば、則ち足れり。而かも世には智の徹底したる人稀にして、徹底せざるもの多く、無智の者なほ多し。如何にして金を得むかと思ふ者は、先づ如何にして智を得むかと思へ。如何にして立身出世せむかと思ふものは、先づ如何にして智を得むかと思へ。智だに得ば、金は自ら來るべく、立身出世も自ら出來るべし。進んでは世を益すべく、人を救ふべし。

智あるものは才あれども、才あるもの必ずしも智あらず。智を大將とすれば、才は兵卒也。智は脳髓の働にして、才は手足の働也。舌の巧に廻るは口の才にして、名論卓説を吐くは口の智也。何事にも才の働もあれば、智の働もあり。智ある者大成す。才のみの人は小成す。否、却つて

失敗するもの少からず。世上才氣あるもの更に進んで智を得むことを力めざるべからざる也。

知識は智慧の土臺なれども、知識は死物也。智慧を得て始めて活動す。科學發達したる上にも、日に日に發達して止まざる今の世、知識の必要や大也。されど知識のみにては不可也。之を活用するの智を備へざるべからず。智は讀書にては得られず、實地に就いて求めざるべからず。百聞は一見に如かずと云はるゝが、又百見は一實驗に如かずと云ひても可也。斯く云へばとて、學問を疎外するに非ず。學問が大に出來れば、實業が出來ずとも、學者として世に立つを得べし。實業家とても、これからの世は無學では通らず。唯一と通りの知識にては、學者には成れず。さればとて實社會に活動する能はざるやうな人は、つまり社會の落伍者也。高等教育を受けたるもの、學問と活動と二者を兼ねれば結構なることなるが、學者となるか、實行家となるか、二者その一となれば、社會に濶歩するを得べき也。

るが、學者となるか、實行家となるか、二者その一となれば、社會に濶歩するを得べき也。

六 信とは何ぞや

信とは何ぞや。先づ辭典を見るに、第一言の行爲と違はざる事、第二篤實にして欺かざる事、第三眞實不妄なる事など也。次に孔子は如何に信を説きたるか、と見るに、

- 一、民信なくば立たず。
- 二、上信を好めば、則ち民敢て情を用ゐざるなし。
- 三、信以て之を成す。
- 四、信なれば、則ち人任す。

五、信を好みて學を好まざれば、其蔽や賊。

孔子の信を説くこと、大略右の如し。信は誠實也。偽らざる也。約を違へざる也。信なくんば交際を始め、世間一切の取引がめちやく／＼になるべし。正直は最良の策略なりとの語もあり。信用にまさる資本なしとの語もあり。信あるものにして、他の信用を得む信用を得ば、天下何事か成らざらむや。俗に『紺屋の明後日』といふことあり。紺屋の業は日光に待つ所あれば、日光を得ざる時は、約束がのび／＼になり勝なもの也。然し紺屋とても約束を違へては、榮えざるべし。われ文を賣りてより、茲に二十年自ら顧みて、深く恥づ、脱稿の期を誤りがち也。もとより始より虚言を吐くつもりに非ず、唯筆を執らむとするも、腹案なく、どうあせりても文成らざること多し。あゝ、我れ信を説くの資格なきを如何せむ。

七 五倫と實行

以上仁義禮智信の五倫を説きたるが、すべて物事には一得一失あるを免れず。伊達政宗は五倫の餘弊を説きて、

- 一、仁に過ぐれば弱くなる。
- 二、義に過ぐれば固くなる。
- 三、禮に過ぐれば諂となる。
- 四、智に過ぐれば虚をつく。
- 五、信に過ぐれば損をする。

と云へり。何人もこの餘弊に陥らざらむやうに用心せざるべからざるが、さればとて用心に過ぎては、折角五倫の本領が身に付かず。願くば新井白石の、

五倫と實行

智仁勇といふも、仁義禮智信といふも、語かはりて、實は同じ。此外に出で、道を行は、廣大微妙を極むといふとも、徒に無用の論にして、實行といふべからず。

の語を服膺せよ。仁義禮智信の代りに、智仁勇と云つても好く、更に敷衍して數十の目にしても好し。文明如何に進むとも、外國との交際如何に進むとも、人の道は依然として人の道也。五倫は依然として五倫也。前にも掲げたるが、孔子が樊遲に仁を教へて、

居處するに、恭しく事を執りて敬み、人と與にして忠ならば、夷狄に之くと雖も、棄つべからざるなり。

と云へる言は、日常處世の根本義なると共に、海外發展の根本義也。この一語を應用して、世に立つを得べく、なほ進んで海外に發展するを得べき也。

終に臨んで、謹んで世上有爲の青少年に告ぐ。今の世人はみな早く職業に有りつくに急也。徒に成績の優等を争ひ、徒に小技を誇り、人はならず、生きたる器械とならんとす。それにて大に成功するかといふに、漸く間に合ふだけにて、活きたる器械の情なさ、どれもこれも、どん栗の背くらべ、小さき鼻と鼻と衝突するだけの事にて、人としては一尙に發展して居らず。國は人を以て興り、人を以て亡ぶ。千羊の皮は一狐の腋に如かず。活きたる器械如何ばかり多ければとて、國豈に興らんや。歐州の戦塵收まらむ日は、東洋の風雲の急なるの日也。我國に必要を感ずるもの多きが中に、最も必要を感ずるは人物也。人物となると否とは、豈に一身一家の得喪に關するのみならむや。

理想の我と現實の我

仁

一、理想の我と現實の我

縁なき衆生は、度し難しと云へり。人は生れながらにして、活動力を有す。その活動力を有するまゝに、現在の境遇に満足せずして、絶えず向上の心を有し、進歩發達を望みてこそ、社會は活動すれ、國家は繁昌すれ、事業は起れ、人の人たる所以の實はあれ、人格を修養せむとするの念之に伴ひて、はじめ、眞の活動あり、眞の進歩あり。然らざるものは、活動すといへども、唯利慾の爲めに盲動するのみ也。いかばかり活動したりとて、人格爲めに大を加へず、高きを加へず、よしや、物質上に成功すとも、竟にこれ沐猴の冠する也。唯、金さへ得ればよし、名さへ得ればよしとて、毫も人格

を修養するの意なきものは、たとへば、棘也。釘は、きかず。かゝる人には、偉人も狂人の如く見え、君子も愚物の如くに見え、百日の説法も、恐らくは屁一つに歸せむ。

賢を希ふは、これ人が賢に進むの基礎也。佛教に所謂縁ある衆生なり。その念が信仰となりて、はじめ、理想に猛進する也。利害得喪に迷はざる也、毀譽褒貶にかゝはらざる也、艱難に屈せざる也、生死以上に超脱する也。既にこの信仰ありて、然る後に、修養あり。修養ありて、然る後に、眞の發達ある也。信仰と修養とは、一寸考ふれば、相密接するやうなれど、實際にありては、甚だしく懸隔す。之を密接せしめむには、現實の我の外に、理想の我なかるべからず。かく現實の我と理想の我と並立するは、これ人格の高大を致す所以の基礎也。

何人も自惚なきはなし。殊に小才ありて、學問も技術も、人並すぐれて

器用に出來、學校の成績よく、親にほめられ、先生にほめられ、郷黨にほめられては、あつばれ、我こそは未來の宰相、未來の大學者、未來の大英雄と、鼻うごめかすべし。かゝる人において、現實の我と理想の我と一致するなり。かゝる人には、古の偉人が、さまで偉人と見え、偉人と見えても、何の我とても、生長しなば、それくらゐには成れるべし、否、以上に進むべしと思ひて、何事も自己を中心とし、人に叱られるれば、我が缺點には氣づかずして、叱つた人が無理と思ひ、忠告をうくれば、唯腹を立て、負けたら、唯くやしがり、すべて、我が氣質、性行、能力をよしとし、之に反する人は、すべて劣等なりと見さげ、よろづ、我を通して、その底止する處を知らず。かゝる人は、到底人格の發達なし。十歳で神童、二十歳で才子、三十歳すぎて、たゞの人となるもの、これ也。

ひろく書を読み、もしくは、ひろく社會を觀察して、人の道は、斯くあるべ

きものと悟り、偉人の偉なる所以を解し、わけが分つて來て、人の短所にも氣がつけば、その長所にも氣がつき、我身の長所を知ると共に、我身の短所をも知り、己れを以て人を律せず、趣味をひろくして、あまねく人を容れ、己れを離れて、判断の公平ならむことを力むるに至りて、始めて、理想の我ある也。現實の我と理想の我と一致する間は、これ色眼鏡をかけた也。その眼鏡青からば、萬物みな青く見ゆべし。己れを知らず、人を知らず、到底わけがわからざる也。理想の我と現實の我と並立すれば、色なき眼鏡をかけた也。赤きものは、赤く見え、白きものは、白く見ゆ。よく己れを知る。従つてよく人を知る。事に當りて、虚心也。理を判して、公平也。人格益々進めば、理想の我と現實の我と一致するかと云ふに、われ以爲へらく、到底一致せず、唯相接近するだけにはなる也。もし一致すれば、少時の恐にかへりたる也。發達なく、進歩なし。その相合せむと力むる處

に人生の價値ある也。生ける甲斐ある也。聖人君子偉人豪傑とも云はる。人は理想の我高く或は大にして現實の我之に雁行して高く或は大也。故に偉大也。理想の我さまで高大ならずして現實の我之と雁行すればともかくもわけの分りたる人也。國家有用の材也。もし理想の我あまり高大にして現實の我之と懸隔すれば、一種の識者となるべく、鑑識ある批評家となるべく、奇人となるべく、變人となるべく、下つては、煩悶するものあるべく、自暴自棄を起すものあるべし。

凡そ人二十歳頃までは現實の我を理想の我と相一致して可也。自信と自信と相合して可也。かくて學問藝能に猛進すべし。この際早く己れを知りすぎて、萎縮すべからず。二十歳頃よりは、そろ／＼理想の我をつくらざるべからず。理想の我なきものは、一生凡人の域を脱せざるべし。唯理想の我の生ずる際に、きはめて危険なることあり。偉人の偉な

る所以がわかるると同時に、我身の小なることがわかりて、失望し、煩悶して厭世の念を起すものなるべし。之に病弱、落第、家資の缺乏など加はらば、猶更の事也。此の如きは、青年のかけり易き精神上の一大疾病也。余は、かかる人に忠告す。その理想の我が、餘り高大すぎるは、これ眞の理想の我にあらずして、自惚の我也。一方に己れの短を知りたるだけにて、眞の理想の我は、未だ生ぜざる也。眞によく己れを知りて、はじめて眞の理想あり、眞の自信あり、眞の發達あるべし。卿等或は思はむ、松の如く大ならずんば、木たる甲斐なし。牡丹の如く美ならずんば、花たる甲斐なしと。然れども、うどの大木のたとへもあり。大なるもの、必ずしもまさらず。小なるもの、必ずしも劣らず。花の美如何も、國民の嗜好によりて異なり、牡丹を美とするものあれば、薔薇を美とするものもあり、葦を美とするものもあれば、櫻を美とするものもあり。一々人の嗜好に媚んとするは、陋な

るわざならずや。松がまされるか、杉がまされるか、竹がまされるか、躑躅がまされるかなどは、正確なる標準あるものに非ず。己れ、躑躅ならば躑躅として發達すべし、松杉たるを願ふには及ばざること也。菊ならば菊萩ならば萩と、よく己れを知りて、發達を遂ぐべし。牡丹となりて、人に媚ぶるには及ばざること也。世俗は、官位の高きもの、名聲の隆なるもの、財産を多く得たるものを羨んで、理想の我、自ら成れるもの多けれども、これやはり、現實の我の慾張り根性に過ぎず。かくて、世俗は、大臣を尊んで、村長、郡長を輕んず。されど、われは思ふ、伴食大臣よりは、村長として、立派に完全に、その職をつくしたるものが偉なる也。少年の士、或は思ふべし、大學の先生は、えらくして、小學の先生は、意氣地なしと。されど、これ大に誤れり。大學の先生は、學問を教ふる也。小學の先生は、人を教ふる也。大學は學問を教ふる處なれば、才ありて、智なくとも、品性は劣等なりとも、學問

問あれば、その先生たるを得べし。小學は、學問のみを教ふる處に非ず、學問よりも、小兒を教ふる術が大切也。小兒を教ふる術とても、小才あれば一寸間に合ふものなれど、真に完全に小兒を教へむには、人格高からざるべからず。大學と小學とは、教ふる方面を異にす。専門の學問ある大學の先生がえらくして、専門の學問なき小學の先生が劣れりとは、云ふべからず。もともと比較すべきものには、あらざる也。人物職業の異なるは、草木の種々あるが如し。妄に草木に優劣を付する能はざるが如く、人にも、妄に優劣を付すべきものに非ず。政治を好むものは、總理大臣を偉なりと思ふべけれど、偉なる軍人、偉なる實業家、偉なる詩人、偉なる村長、偉なる學者、偉なる教育家が、之に劣れりとは、斷定すべからざる也。青年の士、よくこの道理をかみわけて、名利以外に、自家の適する所を知り、理想の我をつくりて、現實の我を勵まして、屈せず、撓まず、斃れてのち

この重きものに就け

止むの概あるべし。既に現實の我の外に、理想の我あり。己れは一身にして二身也。二身に於て一身也。理想の我は、現實の我の長所を知らば短所をも知る。人に褒められても、理想の我は、妄におだてにのらず。人にそしられても、理想の我は、妄に怒らず。理想の我は、現實の我をむちうち、現實の我は、理想の我に合せむとして、毫も失望なく、煩悶なく、相合せむと期する處に、牢き自信あり、希望あり、人のそしりに、びくつかず。人のおだてに、のらず。かくて、發達あり、進歩ありて、人格高まるべく、大になるべし。これ實に修養の基礎也。

二 この重きものに就け

青年は、社會の風潮に染み易く、流行に染み易く、弊風に染み易し。外國

語に通ずるものは、外國の思潮に染み易し。大儒物徂徠の如きも、漢學に感染して、自ら東夷の臣と云へり。西洋崇拜の餘熱未だ全く覺めず。今の青年の士、西洋の諸思潮を生かちりにして、應用を間違ふもの多し。感染が青年の特質也。發達もあり、進歩もあり。されど、見ぬ事きよしと云へり。唯文學上より、遠き彼方の事を思ひやり、所謂見ぬ事清しの譬にも、れず、現在の周圍の惡弊のみが鼻につきて、彼我の人情風俗をも察せずんば、誤らざらむとするも得べけんや。人を知らむとせば、先づ己れを知れ我國體を知りて、然る後に、他の國體を見よ。我歴史を知りて、然る後に、他の歴史を見よ。我文藝を知りて、然る後に、他の文藝を見よ。これ正しく感染するの法也。感染が惡きにあらず。惡しき感染するが惡き也。感染すれば移る。一方に移れば、一方を破棄す。破壊は青年の特質也。古來社會の破壊は、多く青年の手に成りたり。維新の事業も、一方か

この重きものに就け

ら云へば破壊也。明治の文壇の勃興も一方から云へば破壊也。當年の自由主義も破壊也。近年の社會主義も破壊也。社會の事多く破壊也。破壊のみにては不可也。之に次ぐに建設を以てせざるべからず。小兒はよろづ破壊的也。一寸玩具を手にするも直に之を破壊す。されど少年時代の破壊は物質にとまる。青年時代になりて精神に立ち入る。破壊は花やか也。建設はじみ也。破壊には勇を要し建設には智を要す。青年は破壊に長じて建設に短なるが常也。一青年の義經一呼して平家を倒せり。されど霸業を起さむには大江三善の手を待たざるべからず。一青年の項羽一呼して咸陽宮を焼けり。されど漢が新に帝王の業を起すには叔孫通の力を假りたり。馬上にて天下を取るべし馬上にて天下は治まらず。維新の青年は幕府を倒したり。幸に我國には萬世一系の帝室ありたるを以て直に王政に復したるが禮樂風俗一方に破壊あ

一方に輸入あるも未だ全く建設せられざるなり。明治の青年は舊文學を破壊して新文學を興したり。されど新文學は言はゞ假普請也。壯大なる殿堂にはあらず即ち未だ全く建設せられざる也。

老人はとかく保守に傾き退嬰に陥る。建設の氣力もなければ破壊の蠻勇も無し。破壊の無き處には建設も無し。破壊も建設も共に青年的人士に待つ。青年的氣象を失へば保守の外に出でず。人心萎微し沈滯す。青年の士蹶起せよ。社會には破壊すべきこと多く建設すべきこと多き也。

破壊すべきことはどしどし破壊せよ。破壊には勇を要し斷を要す。世心といふことは青年の鳩毒也。婦人の所帯じみるはこれ婦人の世心也。一家の主婦なら所帯じみても可なることあれど男子は飽くまでも青年的なるべし。世俗じみるべからず。くすぶるべからず。情實のあ

る處積弊生ず。情實にかゝれば勇にぶり、斷にぶりて積弊は拂へざるべし。殊に破壊に犠牲を要することを忘るべからず。漢の起るや、陳涉、吳廣之が犠牲者たり。源頼朝の興るや、源頼政之が犠牲者たり。維新の事業成るや、山縣大貳あたりよりして、無数の犠牲ありき。犠牲なくば、破壊も無し。従つて建設も無し。誰も牡丹餅は食ひたし、牡丹餅つくは、いや也。誰も建設者には爲りたし。破壊者にも爲りたし、犠牲になるは、いや也。是に於て、志士仁人、世に出てざるべからず。古聖曰く、身を殺して仁を成すと。又曰く、生をすて、義を取ると。何人も口だけでは之を承知し居れど、いよゝゝ事に臨めば、躊躇す。動物の本能、死を恐れざるもの無し。故に耶蘇教にては、神の愛を設け、靈魂の不死を設け、未來の生存を設けて、死を恐るゝの念を去らしむ。佛教にても、淨土宗の如き、眞宗の如き、耶蘇教に同じき、他力宗にありては、未來の生存得べき。

を設く。禪宗の如き、自力宗にありては、現世に於て、既に生死以上に超脱せしめんとす。儒教も、生死以上に超脱せしめんとす。武士道にありては、なほ更也。武士道や、儒教や、自力宗やを待たずとも、もとゝ日本國民は、死を輕んずるの國民也。知らず、如何にしてか、生死以上に超脱するを得べき。

水は卑きに就く。人は重きものに就く。廉恥なく、氣骨なく、義なく、仁なく、主義なきものにありては、動物、自然の本能、一身の命ほど、重きもの無し。生存を支ふるに最も大切なるものは、金なれば、人によりては、金は命と同様に重し。修養あるの人は、金よりも更に重きあり。命よりも更に重きものあり。故によく常人の重んずる金を輕んじ、命を輕んじ、而して泰然として、他の重きものに就く也。他の重きものとは何ぞや。人によりて種々なれども、曰く、我が天職也。

この重きものに就け

主義也、名也、人道也、君國也、孝也、義也、操也、意氣也。ソクラテスは泰然として毒を仰ぎぬ。耶蘇は泰然として十字架に死しぬ。木内宗吾も泰然として十字架に死しぬ。維新前の志士は泰然として勤王の犠牲となりぬ。袈裟は泰然として、遠藤盛遠の刃に死しぬ。これらは、みな死よりも重きものに就きたる也。

如何なれば、かゝる事柄が、死よりも重きぞと云ふに、そこが即ち凡夫と常人以上の人の分るゝ所也。動物と人の分るゝ所也。國民の氣質にもよれば、社會の風潮にもより、遺傳により、境遇により、修養による。小兒は下らぬことに泣く、大人となりては妄に泣かず。これが怪むに足らざる事ならば、凡夫の過重する死を、修養する人が軽んずるも、亦怪むに足らざるべき也。

三 浮世の迷兒となる莫れ

人の世に處するは、なほ電車に乗るが如し。電車に乗るの心得が分らば、世に處するの心得も亦自ら分るべき也。

普通人は、電車に乗らば、腰かけたがるべし。されど、餘地なければ、立たざるべからず。立たんには、ぶらさがれる革につかまらざるべからず。つかまらざるば、忽ち倒るべし。然れども、革につかまらざるに、而も轉ばずに立たんことを力めよ。これ即ち人が身を世に處する根本の心得也。試みに革につかまらずに、電車の中に立ちて見よ。惰力の致す所、電車動き出せば、身は後に倒るべし。とまれば、身は前に倒るべし。進行中とて、右にゆるぎ、左にゆるぎ、前にゆるぎ、後にゆるぐ。そのゆるぐこと甚だしきまゝに、一秒時たりとも、安らかに立つことを得ず。よろゝ、ころ

浮世の迷兒となる莫れ

く、轉ばずに居られざる也。ナニ轉ぶものかと、身體に力を入れるれば、入るゝほど、足踏ん張れば、ふん張るほど、却つて轉び易きもの也。されば、如何にかすべき、他なし、力を入れず、足ふん張らずに、ふわつと立つべし。而して、車の動搖につれて、身を動かすべし。かくすれば、轉ばずに立つことを得べき也。ふわつとして居る故、外形は、堅からざるも、中心は、却つてしつかりして居る也。轉ぶは、中心を失ふに由る。而して、身をかたくすれば、中心を失ひ易し。轉ばざるは、中心を失はざるに由る。而して、ふわつとして居れば、中心を失ひ難き也。中心を失ひさへせずば、車は、如何にはげしく動搖するも、身は、決して倒れざる也。それとても、唯方法を知るのみにては、不可也。久しき時日にかけて、練習をつみて、然るのち、始めて其方法を實行するを得べき也。

かく、電車の中に立つに、ふわつとして居るべきが如く、世に處するにも

亦ふわつとして居らざるべからず。即ち、溫良、恭謙、圓満、寛大、禮儀を守り、服従を解せざるべからず。傲慢、不遜、狷介、奇矯、小才を恃み、小能を誇るが如きは、身をかたくするものにして、世に處しては、忽ち倒れざるを得ざるべし。又、電車の中に立つに、車の動搖に従ふが如く、世に處するにも、亦世の趨勢に従ふべし。趨勢をあらかじめ知るものは、賢者也。趨勢と共に推移するものは、普通よく世に處するもの也。趨勢に後るゝは、迂也。もしくは頑也。世に處して倒るゝ也。強ひて、趨勢の外に立たむとするも、順境に處する所以にあらざる也。

さは云へ、人、各、扱む所あり。ふわつと世に處するといふことは、言ひ易くして、行ひ難し。又、各、小主觀の識見趣味を有す。世と共に推移するといふことも、言ひ易くして、行ひ難し。その行ひ難きを行はむには、行ふといふことに、趣味を有せざるべからず。電車の中にありても、立つよ

りは腰かくる方がらく也。されど、どうかして、革につかまらずに、立ちて倒れざるやうにしたしといふことに趣味を感じれば、立つことは苦痛にあらざして、却つて面白き也。これ即ち趣味といふもの也。趣味は利害賢愚以外の問題也。斯くすれば、また意志の修養にもなる也。煙草を廢したしと思へど、廢すれば、苦痛也。どうしても廢せられず。これ即ち意志の弱きもの也。意志よわくては、残念也。どれくらゐ我は意志が強きか、よし、一つ試して見むと思へば、その念に驅られて、煙草を廢するとは、さまで困難にあらざ。人は、とかく己れに克ち難きもの也。己れに克つ能はざるものは、世に處するに、大に不利也。電車の中にて、腰かけたきを、立つて倒れずといふことに趣味を有すれば、立つの苦を忍んでも、それが苦にならず。かくて、意志の修養にもなる也。老幼に席を譲るにしても、ほんの義理一遍の、いや、ながらにあらざして、心から喜んでせば、

毫も苦にはならざる也。革につかまらずに立つといふことは、もとより、つまらぬこと也。何でもなきこと也。どうしてもよきこと也。されど、つまることでも、趣味は趣味也。つまらぬことでも、趣味は趣味也。趣味のためにする事が、意志の修養にならば、電車の中にも面白き也。其心得を移して、世に處すれば、世に處しても、面白き也。よく世に處するを得るのたよりともなる也。

なほ進んで、電車の中に立たずして、腰かくる場合にも、いろ、心得べきこと多し。その心得が、また世に處するの心得となる也。電車の中に三箇條の禁制あり。曰く、煙草をのむべからず。痰唾を吐くべからず。太股を露はすべからず。これ也。何故に煙草をのむべからざるかといふに、吞む人はよけれど、吞まぬ人は迷惑なれば也。咽喉など悪きものはなほ更也。何故に痰唾を吐くべからざるかといふに、不潔にして、人の氣

を悪くすれば也。病毒を他に及ぼして、衛生上にも不可なれば也。何故に太股をあらはすべからざるかといふに、醜態にして、風俗上に害あれば也。要するに、電車中の人々に害を及ぼさず、他の感情を害せざるやうにせよとの意也。これ電車中の道德也。社會に種々の道德あるも、亦之に同じ。なほわざ／＼揭示してはなけれど、電車中に種々の道德あり。ただ己れの氣儘に横臥すべからず、高聲に放歌すべからず、他を推しのけるべからず、老幼病者などには、席をゆづらざるべからず、即ち他の爲めに、少しばかりは、我が不自由を忍ばざるべからず。社會にも、道德あり。世に處せむには、社會の道德を守らざるべからず。社會の道德を守らざるは世に處する所以にあらざる也。

電車の車掌と運轉手との外は、何人も電車の中にあるは、その目的とする所にあらざるべし。或處に行かむとするが、目的也。乗客は、たゞ目的

地に早く達すれば、よき也。目的地へ達せむが爲めに、電車へ乗る也。電車に乗るは、方便也。少しばかり不自由なりとも、苦しくとも、たいした事にあらず。他の乗客の爲めに、忍ぶべきは、忍ばざるべからず。然るに、往々、肝腎の目的を忘れて、電車に乗るを目的とする故に、不自由を忍ばずして、動もすれば、氣隨氣儘なる舉動をなすもの少からず。愚といふべし。電車の乗客に、目的地あるが如く、社會の人間にも、いろ／＼の目的あるべし。目的なきものは、浮世の迷兒也。目的小なれば、世に處して、苦痛多かるべし。目的大なれば、大なる程、快樂多くして、苦痛なかるべし。否、全く苦痛なきに非ず。苦痛大なると共に、快樂も亦大なる也。人間は大にせよ、小にせよ、目的なかるべからず。目的なきものには、浮世は闇也。目的あるものには、前路常に光明あるべし。かくて、進みに進み、上りに上る。浮世は、その進み、上る途中の電車也。妄りに、小我、小慾、小主觀をふりまは

すは、進み上るを妨げるこそすれ、進み上るたよりにはならざる也。電車に乗りて目的地に行くが如く、世に處しても、目的地に達せむと力むべき也。凡人以下の人と、凡人以上の人のわかるゝ處は、この心得の有ると無きとに由る也。凡人は、たゞ食はむが爲めに働く也。凡人以上の人は、働かむが爲めに食ふ也。凡人は、たゞ食はむと欲す。大牢を味ひたし、高樓に住ひたし、美服をまとひたし、金時計をぶらさげたし、千金を一攫したしとて、汗水ながす也。即ち電車にのりて、らくをしたき也。おそく着かうが、早く着かうが、又進んで、着くを得ざらうが、そんな事には、一向かまはざる也。凡人以上の人は、電車にのるを目的とせざる也。世に處するだけ、目的にあらざる也。無論、食ふが目的にあらざる也。彼等は、たゞ働かむとする也。働く爲めに、相應に食ふことも必要なる也。働くとは目的に向つて、進み上るの謂也。凡人以上の人と、名に執着して、いつま

でも、電車に乗りて居たきものあり。これ名の爲めに、眞の目的を忘れたるものにて、達人とは云ふべからざる也。達人は名を嫌ふにあらざる、名に執着せざる也。目的地に達すれば、あゝ、御苦勞と、電車に謝しこそすれ、毫も電車に未練は無し。凡人以下の人は、とかく浮世といふ電車に未練を残して、死んでも死にきれざるべし。これまた世に處するの眞諦を得ざるもの也。

終りに臨みて、一言せむに、浮世を電車に譬へたるは、普通の人士をして、順境に處せしめむが爲め也。目的地に達するには、必ずしも電車のみには限らず、電車をよそに、徒歩するものを、電車の中より見れば、ばかしくしと思ふなるべし。然れども、脚の健かなるものは、徒歩も却つて面白きもの也。

大人、君子、志士、仁人、高士、識者などは、國の爲め、道の爲め、民の爲め、主義の

君子は憐れみ小人は戀る
爲めに、往々自ら好んで徒步す。凡眼見て逆境に陥れりと思ふべけれど、かゝる人は、かくの如くにして、其目的に達する也。

四 君子は憐れみ小人は戀る

君子と小人との差異を一言すれば、君子とは、他愛の念つよくして、小人とは、自愛の念つよきもの也。
何人も、全く自愛心の無きものはなけれど、強弱大小の差は、非常なるもの也。我家さへ富めばよし、國は亡びてもかまはず。我身さへ得すればよし、人はどうなりてもかまはず。否、我が利の爲めには、人をつき倒しても平氣なるが、小人の根性也。博愛といふことは、とても腹からは、わからず、國の爲めに萬死を甘んずといふことは、とても出來ず。その強き自愛

の念は、推して己れに近きものに及ばず。小人は、必ず我子を喰ひつくやうに愛するもの也。世人往々曰く、石川五右衛門のやうな悪人でも、子を愛す。その釜ゆでの時、己れの堪へらる限りは、子をさしあげたりと。迂濶な事を言ふものかな。小人なればこそ、子を愛するの念強きに過ぐるなれ。その子を愛するの念は、下りて動物となれば、なほ一層甚だし。小人は、また女を戀愛するの念も強し。その女といふは、女性一般の事にあらず。我が氣に入りて、我が手活の花とながむべき美人也。かゝる女を深く愛するは、自愛の念よりわり出したる也。喰ひつくやうに可愛がる。世上無智の女、その喰ひつくやうに可愛がるを以て、頼母しき御方深切な御方、二世も三世も命にかへてもかしくべき人と思は、他日必ず大に悔いることなるべし。既に自愛より割り出して、喰ひつくやうに可愛がる上は、また自愛より割り出して、大に怒り、大に恨み、毒刃をその腹に

むくるは、情の自然也。愛憎ともに一體也。非常に愛するものは、また非常に憎む。小人は、之を最も我身に近き我子に及ぼし、次に我身に近き我妻に及ぼし、又その次に我身に近き子分に及ぼす。我が氣に入る間は、之を愛し、我が氣に入らぬやうになれば、忽ち之を精神的に殺す。友に對しても、利を同じうする間は、之を愛すれども、利害相反すれば、竹馬の親友も一朝にして仇敵となる。かく、小人は、萬事強き自愛の念より、わり出して人に及ぼす。それが通れば、得意になりて、傍若無人の舉動を爲し。通らざれば、怒り、恨み、泣き、悲み、くやしがり、じれったがり、叫び、世を呪咀す。かかる小人にして、智なければ、父兄の厄介となり、社會の厄介となり、監獄の厄介となるもの多けれど、智の大小によりて、實業家の金満家ともなれば、政治家の敏腕家ともなり、坊主となりては、立派に本堂を建立し、學者となりては、金持となるもの多き也。

君子とても、自愛の念なきにあらねど、一方に、同情にとめるを以て、我身が苦しいから、人も苦しからむ、我身が楽しいから、人も楽しからむと思ひ、人の窮狀を見ては、借金しても救つてやりたくなり、國の爲めなら、死してもいとはず、進んでは、我子を幼君の身がはりに立てし例も少なからず。常に人に向ひては、氣の毒と思ふの念心に絶えず。かゝる人にして、智なくば、お人よしとなり、元氣なくば、隱君子となるべけれど、智勇あれば、その氣の毒がる性分を、忍ぶべきは、忍び、小の蟲を殺して、大の蟲をたすくるともあるべく、宋襄の仁は、さけて、大義大道につくし。身を殺して仁をなし、生をすて、義を取る。それも心からすき好んですることにて、名譽の爲めには、あらず。一身の利害得失の爲めにも、あらざる也。世もし、古の仁人志士の爲し、所を見て、名譽心より出でたるものなりと思ふものあらば、これ、小人の心を以て、君子の心をはかる也。

君子は憐れみ小人は戀る。

今の青年や、もすれば曰く、戀愛は神聖なりと。余を以て見れば、戀愛とは、小人の特有物也。君子には無きこと也。小人の強き自愛の念、女に及ぼして、こゝに戀愛となる。言をかへて云へば、美人と取ッ組み合ひをなす也。その相手の女は、必ず美人也。普通一般の美人にはあらずとするも、その人の趣味よりわり出したる美人也。その美人が戀れし目に、天女と映ず。痘痕も、るくぼと見ゆ。牡犬が、さかりのつきたる牡犬にくツつき廻るが如く、つきまとひ、我意に従はしめむと、つとめてやまず。得ざれば、悪魔として呪ふ。法界悋氣も起せば、甚助ともなる。新聞の三面は、大半は、その小人根性が演出したる事也。古人が、妬を七去の中に入れたるも、宜なる哉、妬心深き者は、必ず小人也。悪人も、愛の度のふかき故、妬心もふかしとは、世上の愚者が、かゝる小人を辯護するの言なれども、その愛のつよきは、小人根性を丸出しにしたるものにして、夫の爲めにあらず

して、我の爲め也。眞に夫を愛するにあらずして、我を愛する也。女は、十中八九までは、必ず妬心ある也。古人が、女子と小人とは、養ひ難しと云ひたるは、こゝな事也。例へば、猛獸の如し、食物をやれば、にこゝするも、やらざれば、人に喰ひつく。女の妬心は、刃物三昧に及ぶためしは、少なけれど、男の甚助は、忽ち刃物をふりまはす。形に刃物をふり廻すは、下等社會に限るやうなれど、中等社會進んで上流社會に至りても、心では、甚助の刃をふりまはすもの多し。その甚助が、戀愛の本體也。小人の特性也。さらば、君子は、人を愛せざるか、女性の美を感ぜざるか、非情の木石か、枯木冷灰かとの疑が起るべし。然り、君子には、愛憎の念無し。されど、枯木冷灰に非ず、非情の草木に非ず、女性の美を感ぜざるにもあらず。元來、愛とは、世人と取ッ組み合ひをなすの域也。取ッ組合すれば、必ず一方勝ち、一方負け。勝ちたるが愛となりて、負けたるが憎となる。愛憎必ず

君子は憐れみ小人は戀る。

君子は憐れみ小人は窮る

相伴ふこと、取ッ組合に勝負あるが如し。君子に至りては、その取ッ組合をなさず。即ち愛せずして憐む也。戀愛の心なくして、慈悲の心ある也。小人は、足地に固着す。故に、人と取ッ組合をなす也。愛する也、又憎む也。君子は、足地を離る。衆庶みな脚下に在り。取ッ組合をせうにも、出來ず。愛するといふこともなければ、憎むといふことも無し。唯上より見下して、慈悲の涙をそぐの外なし。時に人を撲つも、世を罵るも、白刃を用ゐるも、すべて、慈悲の涙の應用也。小人の心は、社會の一隅に在り。君子の心は、天地を包容す。我心、則ち天地也。天地、即ち我心也。一視同仁、己れをはなれて、博愛衆に及ぼす、それも理窟でわかりたるにあらずして、同情のふかき性分の然らしむる所也。愛なきにあらずして、その情大にして深し。小人とても、涙なきにあらざるも、その涙は、泥濘の飛沫也。君子の涙は、草木を潤すの膏雨也。白樂天の咏じたる「夜涙如眞珠、雙々墮明月」

は、これ小人根性の泥濘也。李白の「咳唾墮九天、隨風成珠玉」は、君子の膏雨也。なほわかり易く、物にたとふれば、小人とは、東京市中を徒歩するもの也。立派な家を見て、これは、〜と感心することもあれば、惡臭の洩る、穢屋の前を過ぎて、鼻をつまむこともあるべし。石路をふめば、氣持よく、泥濘の中を衝けば、腹が立ち、見るもの、聞くもの、嗅ぐもの、愛の種となるものある代りに、また癩の種、憎の種になるものもある也。君子とは、愛宕山などに上りて、東京市を見下すもの也。どちらを見ても、はれ〜し、氣持よく、心も従つて、天空海淵也。愛の種になることもなければ、憎の種になることもなし。一身上の不平等も、煩悶も無し、即ち、心、天地と合せる也。即ち、足地と離れたる也。君子は、かゝる氣持を以て、社會にあるを以て、世人と取ッ組合をなさること、なほ、大人が幼兒と取ッ組合をなさるが如し。幼兒に、髻をむし

君子は憐れみ小人は窮る

られても怒らず、小便ばかりかけられても、きたながらざるは、小人もなほ之をよくす、君子は進んで、之を一般の衆庶に及ぼす。幼児に對して怒るは、よくくの馬鹿者也。君子の人が、世人に對して、憎まず、恨みず、不平を言はざるは、なほ大人が、幼兒に對して怒らざるが如し。君子が愛なく、從つて憎なしとは、この事也。また君子が世に對するは、農夫の田畑に對するが如し。農夫は、力をつくして、穀物野菜を培養す。一方には、妨害をなす雑草を除く、如何なる農夫としても、穀菜に對して、戀愛したものなければ、格氣したものなく、雑草を憎んだものもなし。君子は、この心を以て人に對し、また女性にも對す。美人の美は、唯美を感ずるだけ也。野心を包有するにはあらず。美人だから、憐むといふわけもなく、醜婦だから、いやだといふわけもなし。來るものは拒まず、去るものは追はず、醜にして嫁するを得ざるものは、之をもらつてやる。毫もその美醜をとはず。むか

し、足利義氏は、勇士を得んとて、怪力の醜婦をもらひ、吉川元春は、有力なる麾下を得んとて、醜婦をもらひしが、これは、普通とは異なれど、なほ人と取ツ組合をなせる也。朱買臣の妻に對する心が、やがて、眞の君子の心也。その妻、貧苦を見限りて去らむとす。怒らず、數年の後、富貴になりて、汝の勞を謝せんとのみ云へり。終に見限りて、惡口ついて去る、怒らず。去るものは追はざる也。數年の後、果して富貴となる。面あてに、その富貴を見せびらかすは、小人の常なれど、舊妻とその夫とを、あつく、いたはりてやりたり。愛、こゝに至りて、はじめて、戀愛の域をはなれて、慈悲の域に達したるもの也。

日本の武士は、女に戀れるといふことを、一の恥辱としたりき。妻は、親の擇ぶに任せて、不平を言はず、必ずしも美女を求めず。色好みして、町人の美女と縁組したるは、よくくの馬鹿もの也。今や士風地を拂つてむ

なしく、女性を上より見下して、憐んでやるといふことはなくて、自ら下つて、女性と取ッ組合をなし、戀れた、はれた、失戀だ、煩悶だなどと、公言して恥ぢず。氣の毒にも、傍いたき事ども也。

五 この腹藝を學べ

苟くも、一種の觀察眼を以て見れば、匹夫匹婦のごたく、騷ぎにも、一種の趣味なしとせず。されど、吾人の思想より數等下りたる思想を有して、むしろ動物に近き人の活劇は、吾人は、唯氣の毒と思ふの情に堪へず。それも研究することには、趣味を感じれども、かゝる活劇その物には、さつぱり、快感を得ずして、却つて苦痛を感じず。世上もし之に快感を得るものあらば、その人は、所謂彌次馬の類也。小兒になぐりあひをなさしめて、ほく

笑ふの痴漢とえらぶ所あらず。吾人が今の世の詩人小説家に慊らざるは、かゝる痴態を演出すれば也。演劇も、大抵これに類す。よしや、大人物を取りて、その筋も大活劇を演ずるものなりとするも、之を演ずる俳優の人格、低く且つ小なれば、つまり傀儡の動くに過ぎず。吾人は、小説演劇などよりも、却つて偉人の傳記の中に、小説よりも面白き小説を看、芝居よりも面白き芝居を看る也。

茲にその一例として、近世の英雄、藤田東湖に關する一場の出來事を筋立て、見むに、米艦渡來以後、開港と云ひて、攘夷と云ひて、海内鼎沸せし際、水戸の烈公、天下の重望を負ひ、幕府に對して、一敵國の觀を爲せり。その下に、藤田東湖といふ英雄ありて、之を輔け、天下の志士に尊重せらる。一方にまた山内容堂公といふ才物あり。その下に吉田東洋といふ英雄ありて、之を輔けしこと、なほ東湖の烈公に於けるが如し。東湖の名は、當時

になりわたり、今にも傳はりて、歴史上の一偉人と目せられ居れど、東洋の名は一般には傳はらず。されど、その人物を想像するに、學あり、智あり、膽もありて、優に宰相たるだけの材を有せしなるべし。その心術の如何は知らず、唯政治家としては、東湖の友たるに恥ぢざる人なるべし。而して現に二人は朋友也。容堂公、東湖に逢はむと思ふこと切也。吉田往いて之を東湖に告ぐ。東湖諾す。されど、其言を履行せず。かくの如きこと再三也。單に表面より見れば、東湖は、食言者也。されど、東湖の心中を想像せむに、東湖は、土佐藩の臣にあらずして、水戸藩の臣也。之を呼ばむに、それ相當の呼び方があるべき也。我が主人が君に逢ひたがつて居るやうだから、來て逢つてやつて給はれただけでは、おいそれと往かるべきものに非ず。山内方にて、もそれと悟りて、こんどは、小南五右衛門を使者として、やりて、正式に招待せり。東湖直に招きに應じてゆけり。面白き活劇

はこれより始まらむとす。

東湖が容堂公の邸に赴きたりし日は、吉田は、事故ありて同席するに由なかりき。舞臺にあらはれたる大立物は、容堂公と東湖と小南との三人也。茲に一寸この三人の風采性格を想像せむに、容堂公は、當時の三百諸侯中有數の人物也。才と氣とを以てまされる人也。されど、普通の才子よりは上にて、智もありたり、さまでの膽力なく、氣宇はせまけれど、わけのわかりたる人にて、才と氣とをふりまはして、政治家としても、手腕のありたる人也。その相貌も、ゆつたりとした處は無く、尊げなる處も無けれど、口元はしまり、眼はり、鼻は高く、よろづきかぬ氣が、進れるなるべし。東湖は、豪傑肌の偉人也。眼は、すわりて威嚴ありて、しかも、猛からず。筋骨たくましく、ゆつたりと、落ちつき、音吐大に、天空海濶の氣、自ら眉目の間にほとばしれるやうに思はる。小南は、廉直にして、思慮あり、六尺の

孤を託するに足るべき國士也。やさしき目付なるも口はよくしまり顔は長き方にて頭は禿て居りさう也。

しばしが程はこの三人の間に種々の對話がありたれど看客にはきとれず。終りに容堂公、東湖に向ひて、今時の大名はどんな事をしてよきやと問へば、御謀叛々々と大笑して答ふ。酒宴はじまりて、容堂公の顔先づ赤くなり、口も大に軽くなりたり。小南に向ひて、戦國時代の群雄に比すれば、我は誰に似たるぞと問ふ。小南しばし考へて、さればにて候、毛利元就に似させ給ふと存すと答ふれば、吉田ならば、そのやうな馬鹿な事は言はじ。必ず織田信長に似たりと云ふならむとて、立腹のさま也。容堂公は、元就に似たる乎、信長に似たる乎、試みに余の臆斷を下して見むに、信長は、元來天才的人にて、痛癢もち也。氣は小さく、膽も小さく、度量もなく、遠謀も無く、才氣は非凡にて、涙なく、従つて猛烈なる人也。とても天

下を取り得べき大器にあらず。之に反して元就は、優に天下を取り得べき器をそなへたり。危を冒して、一夜に、われに數倍の兵力を有せる大敵陶晴賢を倒すだけの膽略あるかと思へば、また、ゆつくり七年かゝりて、衰弱せる尼子氏を亡ぼすの深慮もあり。智あり、勇あり、權謀もあり、文學のたしなみもありて、徳川家康に比して、まさる所ありとも、劣る所は無き人也。余は信長よりは、元就を偉なりとするものなるが、容堂公がそのいづれに似たるかは、余れ斷案を有せず。唯想像するに、容堂公が才氣すぐれて、元氣なるは、信長に似たり。その度量のひろからぬことも相似たり。されど、信長の如くは、猛烈ならず、文學の才あり、智略もあるの點は、元就に似たり。言は、信長と元就と打して一丸となして、やゝ小さくしたるもの也。東湖も酔ひたり。何とも當否を言はず。唯答へて、『お若い』と云ふ。その言の如く、眞に容堂公は、東湖などに比ぶれば、まだお若い人

也。東湖が如才なき人ならば、唯腹の中で笑つてすますべけれど、氣骨ある人だけに、之を口にしたる也。容堂のお若き證據は、その言を聽いて、立腹せり。『それなら、われと腕押をやらう』といふ。こゝに至りて、益々若し。されど、無邪氣にして、罪なし。大名としては、元氣愛すべし。東湖は腹中にて、豎子なほ教ふべしと思ひしなるべし。その容堂公が戦ひを挑みたる東湖は、如何なる人ぞと云ふに、武藝にもすぐれたる人也。公は到底その敵に非ず。若し東湖にして勝たん乎、公は益々くやしがるべし。土佐藩の恥辱也。君辱めらるれば、臣死す。氣早き土佐人士の事なれば、如何なる騷動を起すやも計られず。東湖の事なれば、死は辭する所に非ず。且つ多數の敵を破つて身を全うすることも、必ずしも難からず。されど、かゝる一小事に、騷動を引き起すは、餘りに無謀也。さは云へ、わざとまくるは、辯問の事也。丈夫の爲すべき事に非ず。流石の東湖も、しば

し考へたりしが、終に男らしく思ひ切つて曰く、『お相手仕らむ』。

いよゝゝ小南が立役をつとむべき機は、到れり。東湖に向ひて一喝して曰く、『今日先生をお招き申したるは、御教へをうけむため也。然るにそのやうな匹夫の爲す事をせらるゝは、何事ぞ』と。一言堂々、さすがに小南は、凡庸の人に非ず。千里に使用して、君命を辱めざる底の人也。もしこれが尋常の婦女子ならば、はじめ容堂公が腕押しせむと言ひ出したる時、それは大變也。必ず負て恥ぢをかゝるべしと思ふ心は、先にたちあわてふためきて、『およしあそばせ』と、容堂公をなだむるかも計られず。公は、言ひ出したることを、後にひく人に非ず。又大名の身として、一旦言ひたる以上は、如何なる事ありとも、おゝさうかと引込ますべき筈のものに非ず。もし公をなだめて、公をしてその言を引かしむれば、これ公をして恥かゝさしむるもの也。されど、東湖は剛毅なる人也。わざと負けて

くれるやうな人に非ず。腕押しすれば、公の負くる事は必定也。如何はせむと氣をもむの餘り、平生の思慮もどこへやら、たゞぼうとするが、凡庸の人の常也。然るに、小南はあわてず、さわがず、靜に東湖の答を待ちて、その相手せむといふや、電光石火、間髪をいれず、一叱して、東湖をへこます。實に大出來の藝也。拍手喝采の聲、滿場に起るべし。

小南が味方の主君をなだめむとはせずして、之を敵にむけたるは、喧嘩を仲裁するに、その宜しきを得たるもの也。酒座などにて、いざなぐりかからむといふ場合などに、少し智慧のある人ならば、兇器の有無により、事柄の如何にもよれど、打たむとする人よりは、うたれむとする方を抱きとむべし。少しぐらゐなぐらしてよき事もあれば、もし味方の打つ人が、力よければ、敵を庇護する風して、力を添へてなぐつてやるべし。力を添へずとも、敵の邪魔して、味方をして氣がすむだけになぐらせるべし。さ

れど、あわつるものは、唯なぐらせじと、味方をだきとむるが常也。かゝる人は、容堂公對東湖の場合にも、唯あわて、味方の主君をとめむとするなるべく、味方を助けずして、却つて味方の邪魔する也。

斯く小南に叱られて、東湖は何と答へたるかは、また看物也。東湖は、座をしざりて、洵に悪かつたと頓首して謝罪す。これ凡眼者の徒の拍手喝采せざる所なれども、流石は東湖也。この場中、第一の上出來の藝也。世上凡庸の徒は、一概に負けるは恥也。罪を謝するは恥也とのみ思ひこみて、實際負けて居りても、負けたと言はず。悪いことをしたと自覺して居りても、あやまつたと言はず。所謂負惜みがつよきものなれど、これ負けるよりも、負けたといふよりも、一層上の恥辱也。負けるは、恥のやうなれど、立派に負けるは、男子的也。負けたら、負けたといふが、男子的也。決して眞の恥辱に非ず。唯負惜みをいふに至りては、女々しきわざ也。眞の

恥辱也。かゝる人、婦女子に多し。男の中の女とも云ふべき小才子、小人の輩にも多し。修養せむとするの士、意をかゝる處に用ゐよ。碁や、將棋や、カルタや、かゝる修養に關して、大に裨益あるもの也。勝たむと思ふ心は、盛ならざるべからず。されど、負けたら負けたと思ひきるべし。更に勇氣を起して、捲土重來を期すべし。辯解し、口惜しがり、負惜みをいふは甚だ見苦しきわざ也。とかく匹夫の根性は、わがよき事は知れど、悪き事は知らず、先輩に諭され、叱られても、唯くやしとのみ思ひ、あゝだ、かうだと言ひわけのみして、容易に悪かつたとは言はざるもの也。少年の人に、して、父兄、もしくは教師、もしくは朋友に戒められて、單にあやまつたと云ひ、人と議論して、負けたら、負けたといふものあらば、その人は必ず修養して、賢人の域に達すべきもの也。東湖の場合にも、負惜みのみ云ふ没分曉漢ならば、必ず言ひわけすべし。實際、東湖は小南に叱らるゝ程の過失ある

に非ず。されど小南の心中を思ひやりて、敬んで謝罪したるは、實に男らしくして、大人物の度量也。表面には、叱る、あやまる、極簡單なやうなれど、その底に底あり。決して眞に叱りたるに非ず、眞にあやまりたるに非ず。とても凡人、同士にては出來ざる藝當也。謝罪したる東湖が、この場中第一の役者也。東湖を叱したる小南は、その次の役者也。容堂公は、この二人に比して、貫目遙に輕し。元就と言はれて腹立ち、若いといはれて癪にさわるまでに、若い容堂公の事なれば、小南が東湖を叱りつけて、溜飲を下し、東湖が謝罪して、胸がせい／＼せしなるべし。東湖が謝罪したる後、座がしらけたり。東湖、忽ち氣轉を利かして、拙筆を揮ひ申さむとて、『容衆者、人君之徳也』とかきて、座輿を添へ、かねて飽くまでも人を教へんとするの態度を示せり。賢なる哉。容堂公その勁拔なる筆蹟を賞し、小南はじめ一同の感歎する聲中、幕下り、面白き活劇、こ

ここに終れり。

注意して、この活劇を見よ。而して事件の裡に磅礴せる英雄の心事を洞察せよ。智あり、勇あり、頓才あるの眞男子的意氣地も見ゆ。之が腹からわからず、大勇自ら生ずべく、大智も生ずべし。唯容堂公の藝一寸面白けれど、立役者の藝にはあらず。氣を負ひ、才を負ひ、従つて度量狭き人の事なれば、元就と言はれて、立腹せしは、さもあるべし。東湖の所謂お若い、也。幼稚園の生徒に、學問は教へられず。かくては、とても人君たる能はざる也。人君は、虚心平氣にて、臣下の言を容れざるべからざる也。お若いと言はれて、さらば腕押しせむと云ひたるは、素人うけのする藝なれば、小役者の域也。人格大ならば、さらば先生の教をうけむと、先づ氣を大きくして、さう見ゆるかは、あと呵々一笑すべく、かくては、始めて、大役者の藝也。素人受けのせざる所に、その人物の大きさが見ゆる也。

されど、容堂が容堂と號したるは、東湖の言を容れたる也。のち、容堂公、詩あり、『容衆人君徳、大聲向吾言、其人今安在、一逝杳英魂』。これ東湖を偲べる也。容堂公の一生は、亦檜舞臺の役者也。

六 己れを憤らざるべからず

人は怒るべからず。他人が我に對する言行に怒るべからず。其怒りや、やがて、恨となつて、我にも益なく、他にも益なし。

人は憤らざるべからず。我身の足らはぬ事に、憤らざるべからず。その憤りや、やがて、奮發心となりて、我れも、進歩し、世をも益す。

蘇秦、六國に遊說せしが、意を得ずして、もとのもく阿彌、しほしほとして歸り來れば、妻は、機織れるまゝにて、出でて迎へず。兄よめは、米を炊いて

己れを憤らざるべからず

己れを憤らざるべからず

呉れず。大に馬鹿にせられたり。苟くも神經ある者は、かゝる目にあへば、それ／＼感ずる所なきを得ず。兄よめも、妻も、あまりに現金也。輕薄也。不人情也とて、怒り且つ恨むは、小人の常情也。かくて、その人は、毫も知恵がつかずして、一家に風波絶えず。蘇秦は、かゝる小人に非ず。かく、嫂にも、妻にも侮らるゝは、つまり、我身の富貴ならぬが故也。と我身の足らぬ事に憤りて、奮發心を起して、再び出でて、説いてまはれば、こんどは、果して功を奏して、終に六國の宰相となれり。金印累々として、故郷にかへれば、前とはうつつてかはりて、妻も、嫂も、かしこまりて、出て迎へて、幾んど頭をあぐる能はず。蘇秦笑つて、なぜ斯く前に傲りて、今は恭しきぞと云へば、嫂曰く、他なし、前には、御身貧賤にして、今は富貴なる故なりと。蘇秦歎じて曰く、我もし洛陽の町はづれに、一段ばかりの田を持ち居らば、豈に六國の相印を帯びんやと。一段でも、田をもち居らば、人に侮

られず、従つて己れを憤ることなく、奮發心が起らざるべしとの意也。蘇秦のみならず、發憤したる爲めに、大に成功したるためし、古來、頗る多し。安積良齋は、近世の名儒なるが、床の間に、美人の畫幅をかけたなり。これは、どうしたことかといふに、この美人は、良齋の舊妻也。良齋年若きころ、このぬか三合持つたら、養子にゆくなどの、古人の戒めをよそにして、庄屋の智となりたるが、その妻は、非常の美人也。甘やかされて、育ちたる上に、縹致を鼻にかけて、妻としては、大にもてあます女なりしなるべし。その夫たる良齋は、醜男也。殊に學問を好み、田に出づるにも、書物をはなさざれば、もとより妻の氣に入るべくもあらず、必ずや、馬鹿にせられ、膝にしかれしなるべし。されど、良齋は、理想高し、もとより、庄屋の智たるを甘んぜざれば、舅や妻の仕打を、さまで、重くは見ず。さる年、郡山といふ處、大火あり。舅、良齋をして、稻稈を郡山にひさがしむ。それを二つの馬に積み

己れを憤らざるべからず

己れを憤らざるべからず

て、もちゆきて、數緡を得たり。情けなや、われ二馬と共に、半日を消して、得る所、わづかに數緡に過ぎず、こんな事して一生を終るは、口惜し、去りて、大に學びて、男兒の志を成さむとて、馬を驛端につなぎおきて、そのまゝ上京して、苦學して、終に大儒となれり。もし良齋にして、美なる妻におとなしく、かしづかれしならば、千里の志ありとも、槽檻の間に飽死したるか、も知るべからざるに、幸にも、美妻に虐待せられたり。而も、良齋の度量は、その妻を恨むるまでに小ならず。蘇秦の如く、人を怒らずして、己れを憤り、決然志を立てたるも、もとはこれ、悍婦虐待の賜物也。げに、男は、美男ならぬこそよけれ。

尾藤二洲は、寛政の三學士の一人なる大儒なるが、もと舟子の子なり。少時船より墮ちて、足を折りければ、家業も出來ず。されば、そのまゝ、朽ちはつるまでの意氣地なしでも無し。茲に憤りを發して、學に志した

り、びつこ故に、人に侮られしこと多かるべし。されど、人を怒らずして、己れを憤れり。一足折りて、絶代の學問を得たるかと思へば、不具は實に二洲に取りては、此上もなき賜物也。

塙檢校は、じめて、和學講談所を開きし頃、伊勢物語の古寫本を得て、校刻して、さてその一部をもちゆきて、時の參政、堀田攝津守に呈したるに、攝州は、それを手にも觸れずして、曰く、さき頃より、そのもとを周旋したるは、かかる小著などに、汲々たれか、しとてに、あらず。文教を振興させ給ふ盛旨を體し、世の學者を益すべき大作こそあらまほしけれとて也。今後そのつもりになりて、奮勵せよと、もし小人根性の人がかゝる言をきかば、或は恥しく思ひ、或は恨めしく思ふべけれど、そこが、塙檢校也。成程、わるかりしと、己れを憤りて、奮起して、終に、武家名目抄、群書類從の大著述をなすに至れり。

己れを憤らざるべからず

己れを憤らざるべからず

賀茂眞淵、志を立て、郷を出てむとするや、老人にて、常に親しく交れる人あり。戒めて曰く、事は成りがたくして、志は挫け易きものなれば、この思ひだちは、われ、子の爲めに危むなりと。眞淵曰く、君が志は辱し、されど、われ、ちかつて、輿馬に駕する身となりて、錦を着るの榮をうくべしと。老人笑つて曰く、輿馬に駕することは、暫く措いて、その僕御とならずんば、幸ならむと。小人根性の人が、もしこの言を聞かば、何ぞわれを輕侮するの甚しきやと、心中くやしく思ふべけれど、眞淵は、君子の人也。その老人の言に、激勵して、己れを憤りて、終に國學の大家となりたる也。かゝる古人の例を見て、靜思せよ。發憤の一事によりて、大學者ともなり、大政治家ともなり、大著述をもなしたる也。豆腐にかすがひは、きかず。毫も發憤する所なくして、たゞぐにやゝしたる人や、ぶたれても、たゞかかれても、蛙の面に水のやうなる人やは、まづ教へ難し。さはいへ、その怒り

方が、一步あやまりて、人を恨んだり、くやしがつたり、下らぬことに面目ながつたり、負け惜み云つたり、ひがみ根性を出したりして、悪い方へゆけば、弊害百出し、爲めに不和起り、喧嘩起ることありとも、毫も人格修養の補ひにはならず。

人を怒るは、小人的也。一生、小才に終りて、大なる智慧は出來ざるべし。己れを憤るは、賢人的也。魯鈍なるものも、竟に大なる智慧を生ずべし。

七 理窟で人格はつくられず

維新以後、無くなりたるは、武士の階級のみならず、武士一般に有したりし、他愛、獻身の精神も、亦大に減じたり。明治十四五年以前の學生は、大半武士の子弟にして、家庭教育もありたれば、宗教だ、神だ、煩悶だ、我れを教へ

理窟で人格はつくられず

など、血液はなほその身につたはりて、義は重く、死は軽し、君の爲めなり、國の爲めなりといふ事で立派に、本當に、安心立命が出来たりしこそ、げに殊勝なれ。

今日この頃になりては、士族平民は、精神上にも、毫も差別がなくなれり。士族の子弟とても、今では、武士根性を有せざるもの多く、平民の子弟とても、よい遺傳をうけ、よい家庭教育をうけ、修養する所あるものは、立派に武士根性を有す。されど、おしなべて、武士根性を有するものは、少く、他愛獻身の精神は、口では、わかるも、腹からは、わからず、否、口でも、わからぬもの多し。従つて、その叫ぶ所を聞けば、神よ、我を救へよ、幸あらしめよ。かくて、この頃は、宗教といふものが、少しにぎやかになれり。そは、主義の爲め、君國の爲めでは、安心が出来ざるやうになりて、宗教家の袖にすがりて、煩悶を醫せむとする弱音が多くなりたる也。つまり、博愛の精神がうせて、

どうしても、己れが己れの念を断つ能はざるまでに、世上一般の人格が下がりたる也。我利々々亡者の多き也。

元來、理窟では、人格はつくられず。個人主義、もしくは利己主義に固着せる、今の多數の世人に、博愛の精神を吹き込むは、容易のわざに非ず。曾て河上肇氏、讀賣新聞に、人生の歸趣と題して、無我の愛とやらを説きたれど、かく云ふ本尊様が、果して真に、無我の愛を腹から解し居るかは、大に疑はしきもの也。その言に曰く、無我の愛を得むには、先づ恩に感ぜざるべからず、呼吸し得るは、空氣の恩なり。空氣の恩を感ずれば、自然を愛すべし。われの生れたるは、親の恩也。親の恩を知れば、親を愛すべしと。これでは、なほ有我的愛也。下根の人の事也。恩に感ずるは、よし。されど、恩に感じて、はじめ、無我的愛を生ずるやうにては、小恩には、小愛を生じ、大恩には、大愛を生ずべく。下つては、怨みには、怨みを酬ゆることなしと

も限らず。河上氏が無我の愛を言ひ出す前に、伊藤證信氏は、無我の愛といふ雑誌を出せり。われその無我の愛の果して真に如何なる意義をよくめるかを知らざれども、想像するに、釋迦の慈悲、孔子の仁、日本の獻身的武士道と大差なかるべし。果して然りとすれば、恩に感ずるが、土臺では、まだ、末節也。さらば、土臺は何かといふに、別に、理窟もへちまもあらず。世に、所謂、佛性の人、即ち是也。そは、遺傳が主也。少時の感化もあるべし。人格の修養もあるべし。たゞ經典をよみ、説教を聞きたればとて、得らるべきものに非ず。個人主義や利己主義にかたまつたる人には、百日の説教も、唯、屁一つ、勞して効なし。河上氏は竹風一味のニイチエをかつぎて個人主義を唱ふる者とは異なり、世上多數の我利々々の爲めに、煩悶する人とも異なりて、品性が高いらしく、又人生の歸趣がわかつた人かと思ひしが、こんな事言はるゝやうでは、まだ、若い御方也。

社會に充滿せる我利々々亡者の。一大なる聲援を與ふる者は、西洋の思想也。西洋の文化入るにつれて、君國本位の日本思想すたれて、個人本位が之に代りしこそうたてけれ。一夫一婦をやかましく唱ふるは、もと個人本位より出でたる事にて、博愛の眞義を解せざるもの也。支那にて、嫉妬を七去の中に入れたるは、大に其理あること也。かく言は、今の世の我利々々亡者は、直にとがめて云はむ、妬は夫を愛するより出づ。大に愛するが故に、大に妬あるなりと。されど、今一つ、廻れば、その夫を愛するは、すべて、我利々々より出でたる也。夫は、妾に幸福を與ふるもの也。死んで下さるな、壯健で居て下されよ、そして妾を愛して下されよ、妾の側にへばりついて居られよ。妾は骨をしやぶつても、あなたには、滋養物を買つてあげます、お酌もします、肩ももみます。貴方の爲めには、どんな勞も辭せず、遺産を多くして下され、生命保険にも入つて下されよなどと、べ

理窟て人格はつくられず

たつきながら、夫の宴會の歸りがおそくなれば、天女忽ち夜叉となり、妾が寂しいと思つたら、早く歸るべき筈と、角を生じ、ふくれ出し、怒鳴り出す。これが西洋の個人本位にかぶれたる、今の世の令夫人の淑徳と申す由なるが、これが眞の婦徳ならば、高等女學、女子大學などと手間取る必要なし。そんじよ、そこらの裏店の山の神に、束髪結はすれば、それで直に令夫人が出來申す也。

女に妬心あるは、個人本位よりわり出したる我利々々主義の弊也。今の世の戀愛などいふものも、すべて我利々々より出てたることに、人間がこのやうな戀愛に狂ふやうでは、うたてや、動物の域を去ること、なほ遠からざる也。女のみならず、男も我利々々亡者也。我利と我利とよりあつて、家庭が出來、學校が出來、社會が出來、文壇も亦出來たるが、實に今の世の中也。

八 未來に生活する者は誰ぞ

小兒は現在に生活す。女子は現在に生活す。凡人は現在に生活す。老ゆれば、過去に生活す。ひとり青年は未來に生活す。青年的氣象を有するものは、老いても未來に生活す。他の語にて云へば、愚者は現在に生活す。智者は未來に生活す。達人は過去、未來、以上、に生活す。

青年、必ずしも悉く智者にあらざれども、未來に生活するの點より云へば、智者也。智者ならずとも、智者たるを得べき資格を有するもの也。なほ進んで達人の域にも達し得べき資格を有するもの也。未來に生活するが、青年の特色也。未來に生活せざるものは、青年にして、青年にあらざる也。

未來に生活するとは、即ち希望あるの謂也。節儉して粗衣粗食に甘ん

未來に生活する者は誰ぞ

ずるは、金を餘して未來の用に供せむとの希望による也。苦學してたゆまざるも、將來大に活動せむとの希望による也。張良が圯橋に靴を捧げたるも、未來に生活したる也。韓信が跨を潜りたるも、未來に生活したる也。大將たらむとするも、未來に生活する也。大臣たらむとするも、未來に生活する也。未來に生活するが故に、現在の小成に甘んぜず、現在の艱苦を艱苦とせず、力もつき、智慧もつき、發展もあり、進歩もある也。

未來の發達は望まされど、現在の安逸も求めたしと思ふは、これ所謂二兎を追ふものにて、終に一兎をも得ざるべし。凡人は、この域に彷徨するものにて、現在にも樂天地なければ、未來にも大なる成功なし。一生ぐずぐずして終る也。此の如きは、眞に未來に生活するものにあらざる也。小兒は、菓子を得れば、啼泣も止まりて、直にほくほくす、これ現在に生活する也。婦人は、金の指環を貰へば、嫉妬の炎も消えて、笑渦早や兩頬に上る。

これ現在に生活する也。智ある者は、十年の計畫を立て、三十年の計畫を立て、五十年の計畫を立て、百年の計畫をも立つ。愚者は、一寸さきは闇也。砂上に樓閣を立て、安居す。氣にくはねば、直に怒る。不平あれば、直に愚痴をこぼす。智者は、さきが見えす。砂上の樓閣には安居せられざる也。消極的に、安りに怒らざる也。安りに愚痴をこぼさざる也。積極的に、大に努力し、大に奮闘する也。

希望が餘りに己れを離れ、現實をはなれすぎては、空想となる。學生が一躍して總理大臣とならむと思ふは、空想也。机上の社會主義を、直に今日に行はむとするも、空想也。空想の種類多し。青年は、殊に空想に富む。學問をつとめずして、博士たらむとするは、餘りに己を離れたる希望、即ち空想也。黄金世界を直に眼前に見むと欲するは、餘りに現在を離れ過ぎたる希望、即ち空想也。普通一般に空想と見ゆるものも、己れの力が非凡

ならば、必ずしも空想に非ず。社會の趨勢を察すれば、必ずしも空想に非ず。現在に生活する凡人は、砂上の樓閣に安住するが、空想に生活する青年は、上つて空中の樓閣を攀むとす。空中の樓閣は、美なり、大なり、善なり。されど、眞にはあらず。その空中の樓閣を攀づる間は、面白けれど、攀づる能はずして人間糞壤の巷に落つれば、失望せざるを得ず。空想を夢みる間は、樂しけれど、社會の現實に接すれば、失望せざるを得ず。空想は青年時代の樂天地也。力の如何にて、これに近づくことも出来るべく、向上もすべし。されど、空想は、夢也。必ず覺むる時あり。飲みすぎせば、二日酔を爲す。飲み過ぎす時は、非常に樂しき代りに、二日酔の曉は、非常に苦し。空想より覺めたる時の苦しみも、之に同じかるべし。煩悶厭世自殺など、この際に生ずること多し。元來、希望の裡面には、失望あり。希望と失望とは、脊中合せのもの也。希望なければ、失望も無し。希望小なれば、

失望も小也。希望大なれば、失望も大也。空想あれば、失望も更に大ならざるを得ず。希望や空想やが青年の特質なると共に、煩悶厭世も亦青年の特質也。人にすぐれたる天賦を有し、少年時代も父母が慈愛の下にそだち、青年時代も不足なく育ち、思ふ通りに勉強も出来て、とん／＼拍子に順境に處し、而も大希望、大氣骨、大向上心なき者は、何人も樂天的となるべし。されど、家貧にして修業するに由なきもの、病弱の爲めに落第するもの、我が天賦の到底希望に適せざるを自覺したるもの、思ふ事常に支吾するもの、純潔の心を有して、社會の汚濁に接するもの、理想の到底現實にあらはれぬことを悟りたるもの、戀を失ひたる者、名を失ひたるもの、永久に逆境に陥りたるものなど、よしや、自殺とまでは進まずとも、誰か煩悶厭世の念起らざるを得むや。知らず、如何にしてか、この煩悶厭世を醫すべき。余は之に答へて曰むとす。これ必ずしも醫せずともよき也。一寸こ

の言を聞かば、冷淡のやうに思ふべけれど、大悟は大に迷ひたる後に來る。寒を知らざるものは暖を知らず。苦を知らざるものは樂を知らず。金屋に生れて、金屋に死するもの、よそ目には樂しきやうなれども、その人は、まことの樂を知らざるべし。茅屋に一生を送るもの、よそ目には苦しきやうなれども、所謂夕顔棚の下涼みの味は、金屋に住むものゝ知るを得ざる所なるべし。煩悶を経ざる安心立命、厭世を経ざる樂天は、狸の土舟、くづるゝことなきを保せず。煩悶を経たる安心にして、安心はじめて堅し。厭世を経たる樂天にして、樂天はじめて堅し。如何なる事にあひても、くづれざる也。霜寒うしてはじめて松柏の勁節を知る。煩悶厭世に堪へるものにして、始めて男子を見る。煩悶厭世に堪へ得ざるものは、男子に非ず。かゝる人が煩悶厭世もなくして、順境に處したればとて、どうせたいした事は出來ず。一の製糞器に過ぎざる也。男子製糞器に甘んずる

ものは、竟に度すべからざる也。製糞器に甘んぜざるものは、教へずとも、自ら煩悶を煩悶し、厭世を厭世して、人格を鍛へあぐべき也。

さらば、如何にして煩悶厭世に堪へ得るかといふに、主觀上には、その人の氣力に待ち。客觀上には、一種の希望に待つの外なし。希望に失して煩悶せるもの、更に希望せよとは、頗る矛盾のやうなれど、その希望は同じ希望にはあらず。戀に失望すれば、名を希望し、名に失望すれば、事に希望し。事に失望すれば、研究に希望するなど、一寸希望をかへるまでの事也。人は、何人も大抵初戀に失望するもの也。青年の士や、もすれば以爲へらく、人生は名と戀とのみと。名と戀とを失へば、浮世が闇黒になる。さりとは、人生をあまりに狭く見たる也。人生は戀のみにあらず、名のみならず、無論金のみならず。力あり、徳あり、事業あり、學問あり、教育あり、政治あり、宗教あり、藝術あり、山あり、海あり、所謂花は紅に、柳は綠也。こ

れらは名をはなれて存在する也。

畢竟するに煩悶厭世に堪へ得ざるは自愛の念強すぎて氣隨氣儘とな
るの致す所也。天はその氣隨なる性格を去り自愛より進んで他愛に移
らしめむとて失望を下せり。まゝならぬが浮世とは氣隨者の愚痴也。
請ふ氣隨の心を去りて達人の心を解せよ。何人もはじめには己れあり、
人もあり、一段進めば己れありて人なし。眼中人なきの域也。更に進
めば己れなくして人あり。全く己れなきに非ず。己れが大きくなりた
る也。即ち三千世界が己れ也。はじめの己れあり人あるの域は常人も
しくは常人より少し頭角を出したるもの、彷徨する所也。人と取組合
ひを爲す。女と取組合ひを爲して戀となり、失戀となり、自殺となり。友
と取組合ひして恨みとなり、憎となり、怒となり、猜忌となり、排斥となり。
利と取組合ひして、親子も他人となり。名と取組合ひて、名を失うて泣く。

取組合ひをすれば勝あり、敗あり。勝てば躍り出し、敗くれば赤筋たて、
怒る。もしくは青くなりて泣く。大人より見て、小兒が下らぬ事に怒り、
泣くが齒がゆければ、達人より見ても同じく凡人の徒に怒り、徒に笑
ふが齒がゆかるべし。凡人の域は、よろづ己れを離れざる也。自愛がつ
よすぐる故煩悶し、世を厭ひ、終に自殺する也。一段進みて己れありて人
なきの域にいたれば己れつよくして己れを以て人を壓す。これ智者の
域也。諸々の取組合ひにうち勝ちたる也。人に勝ちたるも、病にあひ、貧に
あひ、死にあひては、案外にもろく敗ることなきを保せず。名とも全く
は離れざるべく、利とも全くは離れざるべし。いよゝゝ進めば己れなく
して人あるの域に到る。これ達人の域也。凡人よりこゝに一躍するを
得べく、智者を経ても達するを得べし。なまじひの智勇は、こゝに進むを
妨ぐるもの也。既に己れなし、取組合ひするべくもあらず。名なく、利なく

生なく死もなし、愛なく憎も無し。渾然として宇宙と同化する也。之を
時にて云へば、小兒、女子、凡人、愚者は現在に生活し、智者は己れと交渉ある
未來に生活し、老者は過去に生活するものなるが、達人は過去、現在、未來以
上に生活す。現在に生活するものが進んで未來に生活すること、亦信ぜ
らるゝならば、更に進んで過去、現在、未來以上に生活することも、亦信ぜら
るべき筈也。この域に至らば、希望なきかと云ふに、大に希望あり。然し
己れの利のみの爲めに希望せずして、人生の爲めに希望する也。努力せ
ざるかと云ふに、大に努力す。然し己れの利のみの爲めに努力せずして、
人生の爲めに努力する也。泣かざるかといふに、大に泣く、然し己れに泣
かずして、人に泣く也。岐路にも泣く也。白絲にも泣く也。怒らざるか
といふに、大に怒る。然し、人に怒らずして、己れに怒り、人の爲めに怒り、國
の爲めに怒り、道の爲めに怒る。區々たる己れの無きが爲めに、よくこゝ

に至る也。

九 人道は自然の征服に在り

人には、身體上にも、精神上にも、動物的方面と神的方面とあり。動物的
方面とは何ぞや。一身の安全を求めたく、思ふまゝに衣食したく、氣隨氣
儘にくらしたく、租税を出す金にて酒を飲みたく、徴兵にゆくよりは、芝居
にゆきたく、己れを愛すれども、博く愛することを解せず。親孝行よりは、
子煩悩になり易く。國家よりは、一家が重く。人の爲め、世の爲めよりは、
己れの爲め。義よりは、金が大事。犠牲、獻身は、馬鹿げたる事。人に餅つ
かせて、食ふは己れの役。何か氣にくはぬことあれば、直にまゝならぬ世
の中と、愚痴をこぼすが如きは。先づ人の動物的方面也。世の中には、こ

人道は自然の征服に在り

の動物の方面のみを有する人多し。十中七八はこの方面に充たさるゝ人も多し。このやうな人に學ありとも藝ありとも動物をさること、いばくぞや。所謂沐猴冠とは、かゝる人の事也。この方面を遠ざかりて、神的方面に就くが、即ち修養也。されば、神的方面とは、何ぞや。孝を解し、國家につくし、公益をはかり、交りて忠實に、人に接して寛裕、私利私慾、私情に盲動せずして、社會的行動を爲し、個人としてのみ生活せずして、團體として生活するが如きは、まづ人の神的方面也。これ動物には無し。人にありて之を見る。人は人情の動物而して、浮世は義理の巷、人情にもとらず、義理にも合して、この社會の榮えゆく處に、人の人たる所以の價値存す。人に神的方面ありて、社會成り、國家立つ、この方面が發達すれば、發達する程、社會は榮ゆる也。國家は盛也。人が動物と異なる所以の實が、ますますあらはるゝ也。

ついでに言へば、自然のまゝにては、人は動物と異ならざる也。人の動物の方面は、自然のまゝが殘れる也。されど、人は動物と異なりたる天稟を有するを以て、向上して、神的方面を得る也。思へ、動物はすべて自然に支配せらるゝもの也。人にありては、はじめて、自然を支配す。百餘年前まで、一種の神怪物として、恐れし、雷電も、今や電信となし、電燈となし、電話となし、電車となして、之を驅使す。大海をわたり、空中にのぼり、歩せずして山にも上る。魚を漁し、獸を獵し、米をつくり、絹布を製し、海水より鹽を採り、山をうがつて金を取る。科學の進む所、人智の發達する所、人は次第に、第に自然を征服して、到る處に、凱歌を奏せざるは無し。嘗に外界の自然を征服するのみならず、内界の自然をも征服す。自愛を博愛となし、利己を仁俠となし、小を大となし、低を高となし、狹を闊となし、無智を智となし、無識を有識となし、無道を道となすなど、すべてこれ、人が内界の自然を征服

服したる也。内界の自然を征服するのみでも不可也。外界の自然を征服するのみでも足れりとせず。内外の自然を征服するが人の人たる所以也。之を征服せむとする處に、人の生命はある也。之を非とするものは、自滅するの外なし。もしくは、下りて禽獸と伍するの外なし。人道とは、他なし。自然の征服にある也。而して修養の根本は、實に此に存す。玉もみがきてはじめて光る。刀も鍛へてはじめて銳利也。生れたまの山出しの人にては、これ人がなほ内界の自然に征服せらるゝ也。古人が、小人、凡夫、匹夫、頑夫、懦夫などと云ひたるは、かゝる内界の自然に征服せらるゝ者の事也。即ち修養の無き人の事也。

外界の自然を征服するの最大利器は、科學也。世が進めば進む程、一方に科學の必要を感ずること大也。一方には、人は、所謂獅子身中の蟲、即ち内外の自然を征服せざるべからず。即ち修養せざるべからず。その修

養の方法として宗教は、有力にして有効也。宗教と云へばとて、耶蘇教のみにあらず、佛教のみにあらず、儒教も、一種の宗教也。道教も、一種の宗教也。武士道も、一種の宗教也。道を説ける諸種の書も、一種の宗教也。使傳も、讀み方によりては、一種の宗教也。講談の如きも、民間に於ける、一種の宗教也。二宮翁の報徳の教も、一種の宗教也。

宗教に、自力門と他力門とあり。他力門とは、神佛を信じて、救はれむとする者也。耶蘇教、淨土宗、眞宗の如き、これ也。自力門とは、神佛を身解して、自から救はむとする者也。禪宗、これ也。儒教も、ひろき意味の宗教とすれば、これ也。自力、他力、いづれの門よりするも、期する所は、人をして、神的方面に向上せしむるに在り。他力門は、入り易く、自力門は、入り難し。入り易けれども、眞に達することは難し。やゝもすれば、個人本位となり、自愛の念のみを満足せしめて、一身の生前の幸福、死後の冥福を祈ること

に急也。これでは、未だ神的方面に發達したるものと云ふべからず。や、進むも、その宗教を偏愛して、人の道を失ふの例少からず。當年三河武士が、一向宗一揆を起して、その主の徳川家に弓を引きたりしが如き、これ也。山崎闇齋かつて弟子を集めて、孔孟もし兵を率ゐて、我國に攻め來らば、如何にするぞと問ふ。一座啞然として答へず。闇齋曰く、大に之と戰ふ也。これ孔孟の教なりと。宗教も、こゝに至りて、人をして、神的方面に向上せしめたる也。佛教は、ほゞ日本化せり。耶蘇教も、漸く日本化せむとす。三河武士の非を知りて、闇齋の説く所の是なるを悟らば、佛教可也、耶蘇教も亦妨げず。近時青年の士、佛教、耶蘇教を信ずるもの少からず。われ、修養の一方法として之を取る。然れども、個人本位の自愛の念を逞しうし、同臭味の異性相會して夫婦となり、孝をよそにし、忠をよそにし、博愛をよそにし、國家をよそにし、偏狹となり、窮屈となり、我佛獨尊的の行爲に出づ

るに至つては、われ、取らざる也。西洋人は、往々、我佛獨尊の念つよく、耶蘇教以外の國民は、野蠻也、人類として一段下れるものなりと思へども、耶蘇教のみが宗教に非ず。日本には、耶蘇教に下らぬ、むしろ以上の宗教を有する也。西洋人よりも高き程度の道徳を有する也。見よ、車夫馬丁に至るまでも、孝道を解し、忠君を解し、憂國を解し、犠牲獻身の精神を解する也。我國が、日清戦争に、日露戦争に、大捷を得たるも、つまり、これに基づく也。宗教は、自力にせよ、他力にせよ、廣義のものにせよ、狹義のものにせよ、その生命とする所は、信ずるに在り。知るにあらざるのみにて可なるものならば、倫理の教科書一部讀みたるものも、みな道徳家となるべき筈也。倫理の先生は、みな聖人君子なるべき筈也。鯛の頭も信心、大佛も信ぜざる目より見れば、たゞの銅像也。教育勅語は、日本國民の聖典也。苟くも教育をうけたるものは、一人も之を知らざるもの無し。されど、知るだけ

人道は自然の征服に在り

にては不可也。之を信ぜざるべからず。之を信ぜんには、國體を解せざるべからず。國史を解せざるべからず。皇室の何たるかを解せざるべからず。それにしても、神の方面の向上心なきものは所謂縁なき衆生也。神の方面の向上心を以て信ぜれば、こゝにはじめて教育勅語を服膺するを得べき也。修養の道は、信ずるに始まり、神の方面の向上心に發達す。狭義の宗教に就くものは、言ふも更也。いろ／＼の廣義の宗教に就くにしても、信ぜずんば、效なし。神の向上心なくんば、所謂糠にかすがひ也。他力宗教に就くものは、唯信ありて、神の向上心なきもの多し、あまりに無識なるものは、いたし方なき事情ありとも、苟くも教育をうけたる日本青年の士、いづくんぞ之と伍を同じうして止むべけんや。

十 牛馬すら妄りに鞭撻すべからず

黒田如水、家臣の賭博に耽る者あるを知り、之を嚴禁して、『若し犯す者あらば、大罪に行ふべし』と云ひしに、桂菊右衛門といふ者、賭博を好み、傍輩どもの止むるを聞かず、毎夜忍び行きて賭博しけるが、或夜思ひのまゝに勝ちたり。金銀刀脇差の類を羽織に包みて、肩に打掛けて歸る。道にて夜明く。主人如水が太閤聚樂第へ出仕する道筋なり。『行逢うてはなるまじ、萬一出逢ふやうな事あらば、何とか云はむ。賭博に行きたるにはあらざと云ふべきか』など、心の内に思案しつゝ、行きしに、町の曲角にて、たと如水に逢ふ。菊右衛門大に狼狽して、包を肩にしたるまゝにて、地上にうづくまり、如水の何とも云はざるに、『賭博に行きたるにあらず』と云ふ。如水聞かぬまねして行過ぐ。菊右衛門心付き、云はてもよき事を口

牛馬すら妄りに鞭撻すべからず

にしたるを後悔したれども跡になりては追付かず。所詮切腹は免れまじと諦めて、歸りて命の至るを待つ。如水の供に出でたる菊右衛門の傍輩も、屋敷へ歸ると其儘我もくくと菊右衛門の部屋に來り、「如何すべきや」と評議す。「逃亡するの外なし」といふ者多し。菊右衛門聞きて、「今朝なれば格別、今となりては時おくれたり。又逃げたりとも、詮議厳しければ、とても遁れぬ命なり。深く切腹するに如かず」とて動かす。されど傍輩の者菊右衛門の身を思ひて、「遁れるだけは遁れよ」と云ふに、菊右衛門も考へ直さんとする所へ、如水の命を傳ふるものあり。曰く、「侍どもに申付ける事あり。早速庭口へ廻れ」と。菊右衛門をたすくる途は絶えたり。如何はせんとて、口々に悔みつゝ、一同庭口へ行きしに、「居間の庭には中間どもの竹垣を結たれども、手際悪しければ取り壊ちて結び直せ」といふ。さては菊右衛門の事にては無かりしとて、一同安堵す。菊

右衛門は部屋にありて、今か々と切腹の命を待ち居りけるに、一人走り來り、「垣を結び直せとの事なり」と告ぐ。残り居りたるものは、ほとと一息つく、菊右衛門曰く、「平生は何事にも、一番に駆出す吾なるに、引籠り居りては悪しかるべし。たとひ手討になるとも苦しからず」とて衆と共に庭口にゆく。如水縁の端に在り。菊右衛門を見て、之を呼び、「汝は昨夜何れに行きて賭博せしや」と問ふ。菊右衛門も覺悟を極めたる事なれば、憚らず、「某家なり」と答ふ。如水曰く、「餘程勝ちたりと見えたるが、刀脇差の外に、金銀は何程取りたるや」と。菊右衛門曰く、「一貫目餘りも取りたりと思へど、氣づかれたる上は、金銀も用をなさず。其儘に打捨て置きたれば、精しくは知らず」と。如水はたと手を拍ちて曰く、「さては勝ちたるな。出かしたり。金銀を入らぬものと思ふも尤もなり。法度厳しく云ひ付けたれば、あやふき事なり。今朝のやうに狼狽したる

も畢竟は法度を恐ろしと思ふ故なるべし。それ程恐ろしく思はゞ以後は何事にも法度を背くべからず。すべて物事は善き事の次には必ず悪しき事あり。勝ちたる時しかと了簡して止むべし。汝が身代にて昨夜の勝はことしくしき儀なり。この後窮乏する事あらば又賭博したりと、屹度罪を申付くべきぞ。構へて賭博を爲すべからず、無益に物を買はず、窮乏に陥らぬやう心掛くべし』と云ひて罪を問はざりき。或時中間の内竊盜せし者あり。中間之を捕へ置きて如水に向ひ、『御成敗ありて然るべし』と云ふ。當時戦國の風習とて、大小名以下我が臣隸を殺戮することを意となさず。些少の過失にても忽ち手討になし、切腹を命ずるなどは、普通の事なれば、彼の間も手討にすべき筈也。然るに如水命じて曰く、『首を取るは入らぬことなるぞ。早々領内を追拂へ』と。『いや彼奴は、度々盗をなすものなれば是非とも首を刎ねられよ』と云へば、

如水重ねて曰く、『度々盗をはたらくからは、生れつきの盗人なり。此方を追出しなば、定めて先々に盗をなすべし。重ねての主人に首を切らすがよきぞ。第一左様なる者は、一度にて分るべきに、今まで召仕へたるは、其方どもの落度なり』とて、却つて中間頭を叱れり。又或時如水作事奉行を呼びて、『古き屋根板及び木の切屑は、能く念を入れて取集め、風呂屋へ渡せ』と命ず。奉行答へて曰く、『屋根板は大工ども之を取り、其外の木屑は、長屋の者ども盗み去りて、すこしも無し』と。如水聞きて、大に怒り、『かゝる盗人は、搦めとりて首を切れ』と曰ふ。奉行心に思ふやう、『主公は平生慈悲深くして、物ごとに餘り柔和なる故、かかる事も自然としまりなくなりたり、幸の事なれば、今日より嚴重になしけれん』と、其夜より番人を置き、木屑盗人を捕へしめしに、家中の草履取なり。其主人迷惑に思ひ、人を以て奉行に謝すと雖も、『主公の仰せなれば』とて赦さず。

如水の前に出て、「昨夜盗人を搦めとりたり」と手柄顔にいふ。如水心に奉行をたはけたる奴かなと思へども、顔にあらはさず。「よく捕へたりやがて首を斬るべし」とて、四五日ばかり其儘になさしむ。其中に彼奉行罷り出て、「曰く、『今夜あたり首を切りては如何にや。長く縛り置きては、晝夜の番人も要りて迷惑なり』と。如水大に怒りて曰く、『此のたはけ奴能く物を考へて見よ。其者の首を斬り、盗みたる木屑へ彼が衣類を着せ、それを以て人間の代りに使はるべきや。人を殺すと云ふ事は、餘程重き事なるぞ。おのれ等は何とも思はぬと見えたり。急ぎ赦してやれ』とて、散々に叱りければ、奉行は大に面目を失へり。

後漢の劉寛はその名までも寛也。桓帝の時、南陽の太守に遷る。温仁にて恕多し。倉卒に向ひても、未だ曾て聲を大にし、顔色を厲しくしたることなし。部下及び人民に過あれば、但蒲鞭を以て之を罰するのみなり。

帝の時に至りて、大尉となる。帝頗る學藝を好み、寛を引見する毎に、常に經典を講ぜしむ。寛常に座に於て酒を被り睡伏す。帝問うて曰く、「大尉酔ひたるか」と。答へて曰く、「臣は敢て酔はず。但任重く責大なり。故に憂心酔へるが如し」と。帝其言を重んず。或時寛の妻試みに寛を恚らしめんとて、寛が朝服をつけたる所を伺ひ、婢に命じ、肉羹を奉じて行き、翻して朝服を汚さしむ。婢、其言の如くす。寛色を動かさずして、徐に婢に謂つて曰く、「羹、汝の手を爛せざりしや」と。

人或は曰はむ。「今の二十世紀は、忙しき世の中なり、奮闘の世の中なり、生存競争の烈しき世の中なり、寛大々と云ひ居りては、事業抄らず、其身蹴落されて落伍者とならざるを得ざるべし」と。然り、まことに目まぐしき世の中なり。故に勇決せざるべからず、才智を動かさざるべからず。事業に對しては寛大ならざるべからず。研究に對しては寛大ならざる

牛馬すら妄りに鞭撻すべからず

べからず。又人と競争せざるべからず。されど人と競争すればとて、人は鬼に非ず。事業上、研究上、止むを得ざる場合の外は、寛大を以て人を遇するが、文明人士の道也。牛馬すら妄りに鞭撻すべからず。況んや人に於てをや。

義

一 勇氣は刺撃によりて生ず

元來、日本人は、勇氣を以てまされる國民也。一朝事あれば、君國の爲めに、笑つて身をなげうつならはし也。されど、出軍するに當りて、最愛の妻が、餘りに別を惜みて、泣きすぎり、戰場に出で、後も、泣言をいつて來り、死なずに歸つてくれよと云はれては、猛き武夫も、幾分か心ひかれて、勇氣がにぶるべし。勇氣なきものは、なほ更の事也。之に反して、妻たるものが、事を辨へ居りて、私情を抑へて、別に臨みても、妄りに涙をそゝかず、夫が戦ひに出で、後、家の事は、少しも心配するな、唯國につくせよと言ひやりては、意氣地なき人も、爲めに刺撃せられて、幾分か勇氣を生ずべし。村民

勇氣は刺撃によりて生ず

一同が幾旒の旗おしたて、停車場まで送り來り萬歳を大呼せられては、身體何となくぞく／＼して卑劣な事しては、村民に對しても相すまずと思ふは、自然なる純潔なる人間の常情也。その萬歳の聲は、人を殺すの聲なりとのみ思ひとるは、女の腐つた根性也。小人のひがみ過ぎる根性也。無事で歸つて貰ひたきは、人の常情也。されど國民の義務あり、男子の意氣あり、義理あり、個人の上に國家あり、君主あり。そこを辨へて、妄に之を口にせざるは、必ずしも人情をいつはるものにあらず。上古、スバルタの母たるものが、その子の出征にのぞみて顔に創負ふとも、背に創負ふなど云ひたるは、子の死を喜ぶにあらず、死よりも、一層大切なる男子の本分あるを思へば也。國の爲めに死せよと云ふを、死を喜ぶ殘酷非道の心より出でて、人情をいつはると思ふは、私情より外には、何も辨へざるもの也。心に泣いて、顔に笑つてはげますを、胸まさるゝものも、ひがまずに、その本

心をさとり、大事の爲めには、私情を忘るべきものと、相互に合點して、その間に、うそもなければ、理を矯めた處もなく、私意を挾んで、おだてたる處もなし。かく色々の刺撃をうけて、勇士益勇に、怯夫も少しは、勇氣を生ずべし。

凡て、事を爲すには、勇氣が必要也。勇氣を生ぜむには、刺撃が必要也。されど、刺撃は、一なれども、受くる人の如何によりて、その刺撃の度を異にする。その度の多きものあれば、少きものもあり、甚しきは、全く折角の刺撃を感ぜざるものあり。感ずるも、ひがみたる心より、わり出して、誤りたる方向に出づるものあり。げに、縁なき衆生は、度し難し、人の受性如何によりて、刺撃が、益をなせば、害をも爲し、時には、全く無効に歸す。茲に、何か學問の事に關して、先生より正當なる譴責をうけたりとせん乎。この刺撃をうけて、恥づるものあり、怒るものあり、恨むものあり、笑ふ

ものあり泣くものあり憐れむものあり反省するものあり恐るものあり
 も萎縮するものあり發憤するものあり何とも思はざるものもあるべし。
 恥づるは面目なく思ふにてその人良心あり。怒るは間違へりと思ふに
 て智足らずよしと思ふも胸せまくもえ上る性分にて理窟なしにむかつ
 腹をたてるもあるべし。恨むはめしき人にて同情なく察しなく唯主
 我利己の心よりわり出して愚にもつかぬ不平をいだくものにてつまり
 小人根性也。厄介者也。笑ふはわが才を自負して先生が足らぬと得手
 勝手な判断を下すより先生の爲方が可笑しくなるにて氣はひろけれど
 誠實なし。泣くは氣の弱くもしくは狭くして恥ぢたるに由るもあるべ
 く唯くやしく思ふに由るもあるべし。前者はよく後者は非也。更に進
 んで先生の好意に感じて所謂うれし涙をこぼすもあるべし。人こゝに
 至りてはじめて尊し。余はかゝる泣き方する人を愛す又敬す。忠士義

士仁人賢人は必ずかゝる泣き方をするもの也。憐むは良心よりわり出
 して先生がかゝる事にまで心を勞するかと氣の毒に思ふもあるべし。
 これ恩に感じて泣くと唯少し程度が異なりたるまで也。また下りて己
 れは高くとまつて先生がわけがわからずして下らぬ事に徒に心を勞
 すると思ふに由るもあるべし。反省するは自負心を抑へ得る人にて成
 程わるかつたと自ら非を悟る也。かゝる人は賢人となり得べし。一度
 あやまつた事をすれば再びはせず經驗多きにつれて反省の功によりて
 智明かになるべし。恐るは多く利害より打算してわれを見下げはせ
 ぬか點數をからくしはせぬかなど下らぬ事を思ふもあるべし。萎縮す
 るは恥ぢ恐るゝの一層度をこしたるものにてこのやうの人ではとても
 發達はせざるべし。發憤するは反省に活氣の加はりたるものにて男性
 的として大にたのものし。かゝる人は血性の人也。大事業をなすべし。

何とも思はざるは、無神經也。良心もなく、理性にもなく、感情もなく、血もなく、涙もなく、男子の意氣地を解せず、たゞ、づう／＼しくして、廉恥の何たるを解せず、最も教へ難くして、社會の厄介者となるべき劣等なる人也。蘇秦は、嫂に馬鹿にせられて、奮起して、六國の相印を帯びたり、安積良齋は、その妻に冷遇せらるゝに、腹立ちて、學者となりたり。かゝる例は頗る多し、成功者の裏面に立ち入りて、その成功の遠因をさぐれば、必ずや、よくもあれ、悪くもあれ、何か必ず刺撃するものありて、強く感じたるか、もしくは、大に發憤する所ありたるかに基くべし。刺撃をうけむには、先づ之をうくべき、わが性情を陶冶せざるべからず。

二 意義ある活動

黄金に迷ひ、功名に迷ひて、浮世に盲動する者、これ賢と云ふべからず。さればとて、世を遁れて山に入るものは、これ薄志の徒也。これ人生の競争に堪へ得ざるの徒也。これも賢なりと云ふべからず。知らず、人は世に生れて何をか爲すべき。

人には活動力自然に備はれり。足ありて歩き、手ありて握み、目ありて見、耳ありて聞き、口ありて食ひ且つしやべり、精神ありて判断し、理解し、感じ、思索し、想像し、工夫す。これ人の活動力也。この活動力のある處、即ち人生也。活動力のなき處、即ち冥土也。之を極樂と云ふも可也。之を地獄と云ふも亦可也。而して此活動力は、萬人必ずしも一樣ならず。また年齢によりて多少の相違あり。小兒は肉體の活動盛んなれども、精神の活動は盛んならず。老人は肉體精神共に衰ふ。二者共に尤も盛んなるは中年に在り。而して活動少きものは、人生に盡すこと少し。即ちえら

からぬ人也。之に反して活動尤も強き人は世に最もえらき人也。英雄
豪傑とは即ち活動力の最も大なる人の謂に外ならず。古來日本人は老
衰し易く小成に安んじ易く早く大家を氣取りて持重し易く隱居根性
なり易く難局を避けて高見の見物を好み易し。これ大國民の資格を缺
くものと云ふべし。

人は唯活動力あるまゝに、一生活動すべし。これ即ち人生の意義也。
必ずしも何故にと問ふを要せず。強ひて問ふならば唯活動力あるが故
にと答ふれば則ち足れり。試みに思へ睡眠休息は心身に快なるが如
なれども活動したる後なるが故に然るのみ。朝より晩まで今日も明日
も一年中一室内に寝ころんで居れと言はれて見よ、始めの二三日の中は
或は快きは知らねど到底之に堪へ得べきものに非ず。これ人間自
然の状態也。もとより活動の間には小休息小睡眠を要すれども活動ほ

ど人に取りて樂しきものはなし。人は到底活動せざるを得ざるやうに
地球の上を生れ落ちたる者也。英雄豪傑は中にも活動強きものにて休
息と睡眠との時間少し。試みに英雄の傳記をしらべて見よ。睡眠時間
の少きが常也。普通の人にも氣の張り居る時即ち活動盛んなる時例
へば明日面白い花見をなさむなど云ふ場合には、半生寢坊なる人も朝早
く眼覺むるもの也。英雄に至つては、かゝる活動力常に心に充滿する故
多く眠る能はざる也。夜は早く寢朝はおそく起き睡眠時間の多きもの
は、必ず意氣地なき凡人也。豪傑の資格なき人也。滔々たる世上の醉生
夢死の徒、夜は目をつむりて眠り晝は目をあけながら眠れる也。即ち活
動せざる也。

肉體の活動は、人到底他の動物に若かず。俊鶴の如く、一瞬千里を飛ぶ
能はず、馬の如く食ふこと能はず、牛の如く飲むこと能はず、虎の如く一吼

して百獸を摺伏せしむる能はず。然れども精神の活動に至りては、また
比喩すべきものならず。同じ人の中にも、野蠻人種もしくは一社會の
下の階級の人は、肉體の活動多くして、精神の活動少し。これ人として劣
等なるもの也。

人既に世に生る、活動力なきを得ず、活動力ある以上は、少きよりは多き
が尊し。人の修養時代、即ち學校に學ぶ間は、この活動力を養ひつゝある
也。學生の務めとは、活動力を養ふの謂に外ならず。卒業の後之を地球
の上に試む、これ即ち人生の謂也。

健全なる精神は、健全なる肉體にやどる。肉體をはなれて、精神なけれ
ば、靈魂もなし。精神の活動を盛んにせんとせば、先づ身體の健全を圖ら
ざるべからず。暴飲すべからず、暴食すべからず、色海に墮落すべからず、
此等肉體の小活動を抑へて、大に運動すべし。筋骨を逞しうならしむべ

し。而して肉體の活動度に過ぐれば、精神の活動は減ずべし、成るべく
身體の活動は、健全を保つといふ點に止めて、飽くまでも精神の活動を逞
しうすべき也。

人既に活動せざるを得ず、活動にも種類あり。他に損害を及ぼす活動
をなすものは、これ道德の罪人也。又法律の罪人也。決して許すべからず。
私利私慾の爲にのみ活動するものは、これ小人也。その活動如何に盛な
るも、決して謳歌すべきに非ず。社會とは、多人數集まりて、相互に關係す
るの謂也。人は一個人のみならず、更に進んで社會一般の利益幸福を圖
らざるべからず、これ社會をなせるもの、義務也。これより以外に、人生
の目的はなき也。義につくし、社會に盡し、人道につくし、君につくし、國に
つくし、此等の爲めには身をすて、顧みず、これ仁人也、志士也、最も能く人
生の意義を解し、最も能く正當に活動し、最も能く人生の務めを果したる

もの也。古來哲學者といふものは、多く常識に乏しく、人生觀など、迂濶なることを考へて、一生五里霧中に彷徨し、遂に觀易き眼前の人生の眞趣を悟ること能はず、笑ふべきのみ。

三 人の品性を判ずる試金石

世に富豪と云はるゝは、千人に一人あるか、無きか也。富豪とまでは行かずして、ともかくも、衣食に苦しまざるものは、百人中一人あるか、無きかなるべし。人は、みな金の爲に苦む。金故に、頭もさぐれば、腰を折り、意志を枉ぐ。世人一般に、金あらば、盜賊も無かるべく、種々の惡徳もなかるべく、品性も高潔なるべく、人はみな神の如くなるべしとは、金に苦むもの、嘆聲也。然れども、余輩を以て見れば、これ愚痴也、わからず屋の言也。死

するを以て、眞の勇者あらはれ、金あるを以て、品性の高きものあらはるゝは、盤根錯節にあひて、はじめて利器のあらはるゝが如し。

家計は苦しきも、憐れに思ふ人あらば、質おきても、之をすくひ、義理の爲めには、笑つて、財布の底を叩き、借金しても、男を張り、明日より收入の路なきも、主義の爲めに、男らしく辭職する處に、男性的意氣地も見え、品性の高きも見え、人物のえらきことも見ゆ。品性をおとすも、金故なれば、品性の高きをあらはすも、亦金故也、金故に、品性をおとすは、凡人也。もしくは、小人也。高士は、金の爲めに、品性をまげず、否、金の爲めに、品性を發揮するの機を得べし、畢竟するに、金は、人の品性を判ずる試金石也。この試金石にあひて、凡人は、凡人とわかり、小人は、小人とわかり、高士は、高士とわかる。金を得て喜ばず、金なくて憂へず、粗食に甘んじ、粗衣に甘んじ、金に男を賣らず、操を賣らず、金に動かず、賄賂をとらざるに至りて、はじめて高士也。

世亂れて英雄あらはれ、家貧にして高士あらはるゝ也。

されど、酒をのむに金入り、煙草をのむにも金入る、かゝる贅澤品を用ゐることを廢すれば、金残らん、骨董道樂、書畫道樂、盆裁道樂にも金入る、かゝる道樂をやむれば、金残らむ、交際ひろければ、何やかやと費用多し。成るべく交際せぬやうにすれば、金残らむなど、考ふるは、一應は、尤もなる事也。何人も、この考は無かるべからず。然れども、こは消極的方面也。一方には、積極的方面をも考へざるべからず。成るほど、交際すれば、費用多く、道樂すれば、費用多く、酒、煙草を用ゐれば、費用多し。されど、一考するを要す。植物には、肥料なかるべからず。肥料に金を費すは、損なりとて肥料を與へざれば、植物は枯萎すべく、結局大に損也。人が衣食住以外の事に、金を費すは、一寸損のやうなれど、それが其人の慰みにもなり、氣やすめにもなり、保養にもなり、興奮劑にもなりて、其の人に必要なること、なほ

肥料の植物に於けるが如し。よしや、それ程迄に必要ならずとも、出さざるを得ざる金なしと自覺すれば、随つて氣が張り、奮勵して、自ら多く金を得るもの也。節儉すべき事は、節儉せざるべからざれども、食ひたきものも食はず、慰みにしたきものも慰みにせず、まるで牢屋にあるやうなる思ひして、出費を制すればとて、一生得る所は、果していくばくぞや。百金を得て、四十金を残さむよりは、五百金をつかひて、千金を得る方が、遙かに剩餘あり。一寸考ふれば、収入の定まりたるものは、出費を制するに如くはなきやうなるも、唯そのやうな消極的の考のみを有し居らば、増すべき収入も増さずにすむべし、金を得むとせば、先づ借金せよ、これ金を得るの道也。しかし、考へちがひをしては困る、余輩は、たゞ寢食ひせんが爲めに、借金せよと言ふにはあらず、尺蠖の屈するは、伸びんが爲め也。將來大に自己を發展せんには、消極的の考へより、飛び出し、積極的方法を執るべ

天を畏るゝの人たれ
きを説きたる也。

四 天を畏るゝの人たれ

人として缺くべからざるものは、廉恥心也。廉恥心にあらば、臆病者も勇氣を起し、意氣地なき者も元氣を生じ、賤しき根性を去り、下劣なる事をなさず、以てよく紳士の體面をたもち得べきなり。もし廉恥心を失ひて、鐵面皮となり、あばずれ者となり、俗に所謂蛙の面に水となり、了らば、最早其人はだめ也。人には長所あると共に、また缺點あるものなり。多くの缺點は、その長所に免じて、恕し得べきものなれど、たゞ廉恥心なきものは如何なる長所あるも、決して之を恕すべからず。廉恥心なきものを、上に戴くべからず。下に遣ふべからず。廉恥心なきものと共に事をなす

べからず。共に酒を飲むことだになすべからず。

余以爲へらく、廉恥心は、人をして道德的動物たらしむる最大の原動力なりと。如何なる人といへども、多少の名譽心あり、また多少の廉恥心あり。名譽心と廉恥心とは、大に同じくして、やゝ異なる。名譽心は積極的にして、廉恥心は消極的也。名譽心とは、一身一家もしくは一國の名譽を發揚せむと思ふ慾念にして、廉恥心とは、一身一家もしくは一國の名譽を毀損せじと思ふ慾念也。而して余は名譽心よりも、むしろ廉恥心を奨励せむと欲す。その故何ぞや。

完全なる名譽心は、決して害なきものなれど、下根の人の悲しさ、名譽心あるが爲めに、かへつて悪事をなし、一身一家、もしくは一國の、不名譽を來すことあり。實力、實功なきも、なほ虚名を博せむとするは、凡人の免れ難き所、我を揚げむが爲めに、友をおとすことあれば、人を欺くこともあり。

天を畏るゝの人たれ

我が一身の名譽を博せむが爲めに、幾千萬の無辜の人を殺すこともあり、學生に就いて手近い例を云へば、一時郷黨に誇らむとするの小名譽心に驅られて、他人の文を剽竊し、直に化の皮があらはるゝとも知らず、得々然たるものあるは、余のしばし見聞する所也。かゝる破廉恥の事をなすは、畢竟するに積極的には名譽心に驅らるゝの致す所にして、消極的には廉恥なきの致す所也。苟くも廉恥心あらば、虚名を望む心如何に盛なるも、決して良心を欺き、人を欺くの悪事はなさざる也。

往古武士が軍陣の間に、祖先以來の家系を名乗りしは、これは必ずしも人に自慢するものに非ず。蓋し下らぬ者と闘ひて、之にうち勝つとも、決して譽れになるものにあらざれば、成るべくよき敵と闘うて、之に打勝たむとするは、古の武士の常情なりき。敵にむかひて、我が家名を名乗るは、即ち敵をして、我が下らぬものにあらざるを知らしむる也。即ち表面に

は敵を求むるの意あり。裏面には廉恥心ありし也。我はかゝる名門の子孫なれば、決して祖先の名を汚さじとの廉恥心、こゝに武士を驅りて、戰場に花々しき働きをなさしめしなり。刀の手前と云ふことも、帯刀する武士の體面をけがさじとの意をふくめる也。武士は喰はねど、高楊枝侍の兒と云ふものは、腹が減つてもひもじうない、渴しても盗泉の水は飲まざと云へるなど、いづれか廉恥心に基かざる。古の武士が借金の際、文にも返し返金せざれば、人なかにてお笑ひ下さるべしとのみ書きしも、廉恥心ある者ならでは、出来ぬこと也。あらゆる瘦我慢は、すべて廉恥心より起る。かくて清貧に甘んじて、不義の富貴を望まず。不正不當の事を爲さず。卑怯未練のふるまひをなさず、従つて自ら道德的動物となる也。名譽心に對しては、消極的なれども、言行の上に大に積極的也。また活動的也。而して廉恥心は、如何にして養成し得べきぞ。

天を畏るゝの人たれ

前にも言ひたる如く、人には生れながらにして、多少の名譽心あると共に、また廉恥心あるもの也。唯習慣と小名譽心とによりて、折角の廉恥心をくまらますこと多し。習慣とは、例へば、惡所遊びをなす多くの友と交はれば、惡所遊びすることを恥と思はぬやうになり。あぐらかきて酒飲む家庭にそだちたるものは、あぐらかきて酒のむことを普通の事と思ふに至るべし。小名譽心とは、前にも例をあげたるが如く、虚名を博せむとする妄念に驅られ、ちよこ才のあるまゝに、人を欺き、良心をも欺くこと也。此外折角生來の廉恥心をくまらます原因少からざれども、要するに習慣をつゝし、小名譽に駈られず、古人の言行にかんがみて、天を畏るゝの人たらむことを期すべし。

古の武士の廉恥心に富みしは、遺傳により、又社會の制裁にもよりたれど、主として家庭の教育の致す所たらずんばあらず。かくて私を後

にして、公を先にし、義を重んじて利を輕んじ、國家も、社會も、はじめ、よく其體面をたもちし也。余は斷言す。武士道の裏面には、必ず廉恥心ひそめり。

借問す、今の紳士、名譽心、野心、利慾の外に、廉恥心を有せりや、否や。

五 この瘦我慢の趣味を解すべし

物事には、すべて、二面の眞理あり。大志をいだくものは、早婚すべからずとは、これ一面の眞理也。妻子の負擔多くして、貧乏するが、却つて一種の修養になるも、亦一面の眞理也。然し、一般の常人には、修養にならざるかも、知れず。常人以上の人にして、はじめて修養になる也。幼にして富み、長じても富み、一生金の苦勞を知らざるものは、恐らくは、人生を解せざ

この瘦我慢の趣味を解すべし

るべし。『おちぶれて袖に涙のかゝるとき、人の心のおくぞ知らるゝ』と
 古人は歌へり。人は貧乏して、なほ一段進みてはじめて、人生に觸れるべ
 し。金の十分なる人が、進んで慈善の事を爲し、退いて賄路を取らず、不正
 の金を取らざるは、普通の事也。誰でも出来る事也。『妻臥病床、兒泣餓』
 の境遇になりて、身を挺て、勤王を唱ふる人にしてはじめて、其常人以上
 なるを見る也。債鬼四襲、米櫃しばく、空しき中に、泰然として、清貧に甘
 んじてはじめて、其常人以上なるを見る也。妻子の爲めに、氣が老ゆるも、
 あせるも、氣骨を失ふも、すべて、まだく、常人也。余は常人に向ひ、氣が老
 いぬ方法、あせらぬ方法、氣骨を失はぬ方法として、晩婚をすゝむるまで也。
 常人以上の質を有するもの、質はなくとも、英雄豪傑に心酔するものには、
 妻子何かあらむ。多き負擔何かあらむ。否、貧境、苦境、逆境が、却つて、かゝ
 る人に修養になる也。この趣を解する男子にしてはじめて、共に談ず

るに足るべき也。青年の士、やゝもすれば、苦學の苦を云へども、青年時代の
 の貧窮は、さまで、身にしむものに非ず。妻あり、子多く、係累多き人の貧窮
 が更に一層身にしむもの也。青年時代の貧窮に堪へ得ざるやうの人な
 らば、晩婚して、獨身生活を長くつゞくるが氣樂なるべし。平田篤胤は、國
 文界の豪傑也。その窮境にありて、伴友信に與へたる書翰に、常人以上の
 氣象を寓せり。『果てしも無き申事ながら、絶窮の様子、前後をつめて、こ
 の節の苦しみ、まづ暮にはあてもなきに、春になりてとあたりまへに、借金
 方を盡く斷り、どうやらして、年は取り候處、たかだか八人扶持ばかりを
 こねまはし候。こと故何として參るべきや。そこへ旦那方角火消故、そ
 の火事場の出醫を申しつけられ、これも無人故なりと、目付が頼む同様に
 申し候。故、ひつ込もならずと受け候處、火事羽織なし。そのみなら
 ず、醫者は醫者だが、藥箱の上覆無しといふ私のこと、そこで大騒ぎして苦

しむ所に、駿河より真柱の料一兩來る。ところが未だ年始に出でず、外はうつちやつて置いて、本でも借る所へ行かねばならぬから、それをもつて、先づ人の曲げたる熨斗目をかり出して着て、たゞ一日に年始をつとめ翌日もとの穴へ納めて、それで火事羽織、薬箱の上覆を買ひ、まづほつと息をつくくと、去年門人の悪ものが、藏本板を曲げたる十兩の尻が来て、板を先へ引取らむとするに、これに當惑、どうしても先が聞かぬから、同心を頼み、おしぶちに待たせて、六月まで安心にはなり候へども、これにも一兩ばかり。尤も人にかりて、利を出したり。先づよいと思ふと、去年大煩ひの砌に曲げたる本ども、元利ともに十兩ばかりのもの、だんく斷り申置候へども、十四五箇月になる故、流れるといふに、ことに人を入れて、先づ暫しと云ひても聞かず。そこで佩物にて、先づ利分半金のかたに入れて、をさめたり。すると去年春下女が深切でもとは、予に聞かせず(病中なればなり)

彼が服類を三兩半曲げたるが、流れると云ふて、櫛の齒を引く如く、質屋が是非に(これは今以て先づだましておし付置)。所が三月に近より、去年三月、曲げたる櫛が流れるとて來る。これを流しては、娘が泣くから、このあたりの苦勞云ふばかり無し。そこで虚病をかまへて、例の火事羽織と、ふだん着用羽織とを入れて、一兩二朱半にて受け出したれど、節句の日に、子どもに着かへさする事叶はず、今年始めて、ふだん着のまゝにて、節句をさせ候。外へ出るなど云ひつけければ、おとなしく居り候。二人の小どもが心内ふびんさ、野弟心内御察し下さるべく候。所へ、和名抄の寫しが出来たといつて、その料をよこせといふ。やれ、かれこれ二朱。一步二歩のかりは、櫛の齒を引くが如し。例の島ちりの小袖一つ入る所、漆塗の如くなりて、入湯にも行かれぬ仕合、羽織が無いから、内會も出來ず、などあるは、如何にも、その貧苦の様が想ひやらるゝ也。されど、篤胤は、『この

この瘦我慢の趣味を解すべし

中に。古史傳の著述は怠りなく相つとめ申候。御憐み下さるべく候』
とて、貧中に泰然として著述に従事することを説けり。更に進んで、『古
人も貧を語るは、求むる事あるに似たりとか申す事にて、他人には申難き
ことながら、心ありて、君には申候。それは、その中にて、よくその學をす
ると、さきにはめられむといふ弟の情にて、なか／＼以て一兩や二兩や三
兩四兩の目くされ金の合力を望むやうに思召し下さるまじく、そこらの
賤しき心は、つゆばかりも之なきこと、神と君とは、よく知しめさむ。しか
らば、この事を語る心の實は、如何にといふに、とても、この分にては、とりつ
いき難く、なか／＼に、屋敷の入口邪魔になり候。故暇を取つて、浪人とな
り候て、かへつて、よき術も出来べくと存じ候なり』と。男性的意氣
地を吐露せり。むかしは、學者は、多くは貧苦なりき。今とても、今後とて
も、學者にして富まざるまでも、生計のらくなるは、きはめて少數也。多く

は貧苦の中に研究せざるべからず。

さらば、貧苦の中に勞働して何が面白きぞとの質疑起らむ。古人も歌
へり、『うきことのなほ此上につもれかし、限りある身の心ためさむ』と。
これ決して負惜みに非ず。空威張りにあらず。大丈夫の意氣地也。こ
の歌の心が、腹から分らば、貧苦の境に晏如たるを得るの趣も、自ら解決
すべき也。苦といひ、樂といふも、つまり、心のもちやう一つ也。少しも金
の心配なくして、金屋に起臥するとも、心樂しからずんば、其境遇は、毫も樂
しからざるべし。否、我主義や趣味に反する事をなして、らくに暮すより
は、遙に樂しく思ふべし。これ常人には出来がたかるべけれど、修養ある
ものには、必ず出来ること也。物質以外に超然たるを得るも、つまり、修養
のいたす所也。贅澤をしたしと思ふも慾也。又趣味也。美酒をのみた
しと思ふも然り。美服をまとひたしと思ふも然り。それと同じく、われ

この瘦我慢の趣味を解すべし

この瘦我慢の趣味を解すべし

は、如何ばかり窮境に堪へらるゝかを試みむと思ふも、常人以上の人ありては、一種の慾なり。また趣味也。未だ物質以上に超脱する能はずとも、この瘦我慢の趣味を解すれば、貧苦は、必ずしも不幸にあらざる也。人は少年時代、青年時代に富みたる家に、らくに育つよりも、貧家に育つが、却つて其身の幸福也。奮發心も起れば、思ひやりも生じ、腹が大きくなりて、わけが分つて来る也。少年にして貧なるは、幸福なる哉。壯年にして貧なるも、必ずしも人生の不幸とは云ふべからず。富貴は浮雲の如し。人生は波瀾多し。たゞ物質上の幸福をのみ思へばこそ、悲しくもなれ、恨めしくもなれ、苦しくも思ひ、泣きもすれ。物質以上に超脱して、はじめて、眞如の月を見る。常人以上に出でずとせば、この覺悟が第一也。この覺悟だにあれば、わざゝ凡人以上に出でむと思はずとも、自ら出づる也。貧も面白く、富も面白く、卑劣なることをせず、不正なることをせず、悠悠とし

て、自然と同じく化する也。窮すればとて、敢て神を呼ばず、萬死毫も悔むざる也。

六 勝負に負けても角力に勝て

われ少時より碁を好めども、下手の横好き也。恥しや新聞にあらはるゝ碁戦を見るも、竟にはこれ盲目の垣覗き也。四十餘年の久しき碁を圍むこと幾千番、一度も初段以上の人と打ちたることなければ、拙手は、いつまでたちても拙手也。父は所謂田舎初段の力量ありきと聞きつれば、せめて我もそれくらゐに進みたしと思ひこみしことも、度々なれど、いやいや、碁がえらくなりたりとて、何でも無し。上手は上手で楽しみあり。拙手は拙手で楽しみあり。興に乗じては、夜を徹して碁を打つことを辭せ

勝負に負けても角力に勝て

ざれども、いや、餘り碁にふけりては、勉強を妨ぐ。遊戯の碁よりも、本職の仕事が大事也。つまり、根本の心がけが、碁に對して不忠實也。従つて、打ち方も魔道に陥れり。先頃、『江湖』に三段の伊澤春湖氏の碁論を讀み、自ら魔道に囚はれて、到底策碁以上に進む能はざるを知る。あゝ、われ在來自ら挟みし所を一擲して、眞の碁の道に入らむ乎。さるにても、一通り碁に對して自ら挟みし所をのべて、世上策碁の士の一讀を煩はしたしと思ふ也。

われは所謂策碁の一人なるが、何故に策碁と稱するかは、わからず。思ふに、目が荒いとでも云ふ意味にや、碁は多數の人にありては、娛樂の具なるべけれども、余にありては、娛樂の具なると共に、かねて、一種の修養の具也。碁によりても、男性的意氣地を養成せむとする也。われもと氣よく、膽小也。これではならぬとて、自ら力めて、元氣よく闘ひて、氣を養ひ、膽

を練る。之を角力に見るも、勝負に負けても、角力に勝つといふことあり。先きの常陸山、荒岩、海山などの取口を愛す。唯身體瘦せて力なく、手を知らざれば、思ふ所を角力に發揮する能はず。碁は直接體力に關係せざれば、勝負には負けても、碁に勝つといふことは、心掛次第にて出来る也。角力にて唯負けじとすれば、敵の犢鼻褌をつかみ、頭を敵の胸にあて、喰ひ下がるに如かず。斯くすれば、弱くとも、敗ること無し。されど、消極的也。積極的に非ず。態度に於て、既に負けたるもの也。斯くて勝つとも、何の勝ぞ。實戰に於ては、止むを得ざる場合あれども、娛樂としては、斷じて不可也。修養としては、益々不可也。碁に於て、よしや終局に敗るゝとも、優勢なる打ち方を爲し、思ひ切つて、大計畫を試み、卑怯未練なる振舞をせず、ちよろまかすやうな事をせず、臆せず、びくつかず、旗鼓堂々として進み、眼前の勝敗に屈せず。敗れてまた闘ひ、一年又一年、うまず、厭きずして、

終には敵を壓倒せむことを期す。一たび石を下さば待つたといふことはおくびにも出さず、唯我力と術とを試みるを樂しみて、必ず勝負を氣にせず。もし勝負を氣にしすぐれば、思ひ切つた飛躍も出來ず、基勢萎縮して、まことに意氣地なくなるもの也。

人の本性は、よく碁の如き遊戯にあらはるゝもの也。碁にありては猶更也。氣強きか弱きか、膽大なるか小なるか、廉恥を解するか解せざるか、小才か頭腦粗か、密か正しきか、邪なるか、勇なるか、怯なるか、未練なるか、思ひ切りよきか。思はず知らず、人格修養の志しあるもの、其心掛にて碁を圍まば、娛樂の外に、一種の大益を得べき也。われ在來共に碁を圍みたる碁士の幾んど其數を知らず。中には、其心術敬服に堪へざる者あれども、憫れむべき人も少からず。負けると口惜しいからとて、打たざるものあり。到底かゝる人とは、大事を談ずべからざる也。非運に陥れ

ば忽ち待てといふもの多し。これ眼前の小勝敗の爲めに、恥を忘れ、男性的意氣地を没却せるもの也。負くれば腹たてゝ知らぬが佛の妻婢にあたり散らし、食時になりても食を出さず、一朝勝てば大にうれしがりて、酒よ肴よともてなすものあり。釋氣むしる愛すべし。敵が知らねば、大利を得べしと、思ひ切つた手をうち、もし知れて、大損となつた場合には、忽ち待てといふものあり。奸惡なる小人の心也。一時の勝負にかゝはりて、捲土重來の氣力なく、後日の大成を期せざるもの多し。志の小なる憫むべし。なべて、男子より女子の方が負くることを口惜しがものなるが、男子の中にも、女子的の人少からず。さればとて、勝つても、負けても、どうでもよしとて、一向氣力を用ゐざるも、碁としては面白からず。人はさまざま、碁のうちかたもさまざま、必ずしも己れの趣味を以て、他の趣味を律すべきにはあらざれども、余の趣味を云へば、余は碁に於て鬪は

勝負に負けても角力に勝て

むとす。争はざる也。争ふは女性の事也。小人の事也。男性中の男性にしてはじめて大に闘ふ。われもとより男性中の男性にはあらざれども、そこは余の所謂修養の具とする所以にして、向上發展の微意實に此に存す。さは云へ、天賦は如何ともしがたし。頭腦粗笨にして、ふかく考ふる能はず。やゝもすれば、あわて、躁急に失し、終局の小勝敗に拘らざらむとすれど、これだけ取つて置けば勝つとて、折角の大計畫を小成に終らしむることあり。むかしは待てと云ひしことも、折々ありたり。わが基に於ける修養の前途は、なほ、遼遠なる哉。

余等策碁にありては、碁は戦ふの遊戯也。争ふの遊戯に非ず。碁を知らざるものは、往々曰く、碁は隠居的也と。何ぞ知らむ。碁には、非常なる氣力と機略とを要することを。戦ふにも、兵卒的なり、大將的なり。兵卒的は、なほ小也。進んで大將的とならざるべからざれども、遺憾ながら、策

碁にありては、兵卒的也。即ち、うち過ぐる也。即ち、要領を得すぐる也。不得要領にして、要領をうるが、大人物の一資格也。また碁をうちても、大將的なる所以也。余等策碁ながらも、この趣を解す。たゞ手腕之に伴はざるのみ。

碁の上手と下手とは、さまざまの區別はあれども、先きの見ゆると見えざるとは、著しき區別の一也。名手にありては、數十手も、先きが見ゆれども、策碁にありては、唯一手の先きも見えざること多し。之を譬ふれば、碁の名手は、達人也。識者也。策碁は、浮世に活動する事業家也。先きの見ゆるに越したことは、無けれども、あまり見えすぎては、蠻勇なくなり、活動にぶる。達人や識者では、事業は出来ず。或る點までは、盲目にして、向みずに進むこそ、面白けれ。水にゆきあたれば、泳ぎ、山にゆきあたれば、上り、堀あれば、飛越し、いろ／＼、障碍艱苦の中に、自ら張合もあり、快樂もあ

勝負に負けても角力に勝て

り。碁にても死んだ石が活き、死にさうもなき石が死に、縦横無盡に斬りまはるは、くろうとより見れば、馬鹿げて居るかも知らねど、碁の趣味とする所也。盲動は、實社會に於ても必要あり。まして碁の如き遊戯にありては、よしや、低きにもせよ、一種の趣味たるを失はざる也。
あゝ、われ低き趣味に就いて、一生碁に終らむ乎。抑々在來自ら挟みし所をすて、くろうとの域に到らむことを力めむ乎。くろうとは、くろうとの趣味あり。碁には、碁の趣味あり。必ずしも其高下大小を問はず、思ふに、わが碁趣味盡きむ日は、くろうとの域に入るの日なるべし。

七 人の迷惑を顧みよ

人間の精神上に主義なかるべからざるは、肉體上に食物なかるべから

ざるが如し。日本國民として、一致したる主義なかるべきは、なほ日本人が米を常食とせるが如くなるべし。されど、各個人が、宇宙人生を觀じ、世に處し、事をなし、安心立命を得る所以に至つては、悉く一致すべき筈の者に非ず。

先づ食物の上より云はむに、下戸は概して甘きものを好み、上戸は酸きものを好めども、下戸の中にも、團子を好むものあり、牡丹餅を好むものあり、汁粉を好むものもありて、さまざま也。上戸の好む者とても、さまざま也。鹽からの好きなものもあれば、嫌ひなものもあり。酸のものも好きなものもあれば、嫌ひなものもあり。魚類の中にも、鯛、鯉、香魚、鰻、それぞれ人によりて嗜好を異にし、八百屋物の中にも、筍、松茸、大根、くわゐ、それぞれ好みもせられ、嫌ひもせらる。元來食物自身には、それが第一等なり、第二等なりとせらるべき價格の標準なし。たゞ人々の食性如何によ

りて、價値は増減するもの也。されど己れの好むものは人に施したく己れの好まざるものは人に施したくなきは、自然の人情、蕎麥を好むものは天下第一の美食、之を好まざるものは共に談ずるに足らずとて、無理にも客に進めて、客の難有迷惑を感ずることを知らざるこそ愚なれ。

これ獨り食物の上のみならず、主義の上にも、所謂主義の押賣をなして、よい氣になる學者、教育家、宗教家多きは、笑止千萬の次第也。人の食性の異なるが如く、人の氣質も亦異なるなり。境遇も亦異なるなり。然るに、世の先輩、教育家、學者、論客、宗教家の輩、往々自家の氣質、人物、境遇に適せる主義を執りて、之を人に強むとする者あり。上戸に牡丹餅をくはせ、もしくは下戸に酒をのまするの類也。

佛教、耶穌教、マホメット教、婆羅門教など、宗教にも種類多し。同じ佛教の中にも、數十派あり。耶穌教にも、數十派あり。所謂宗教以外、孔子の主

義もあるべく、ソクラテスの主義もあるべく、儒教の中にも、朱子派あるべく、陽明派あるべく、徂徠派あるべく、仁齋派あるべく、折衷派もあるべし。主義とする所の異なる教義あること、千差萬別也。なほ食物の千差萬別なるが如し。一食物を以て、一人を律するは可也。萬人を律すべきに非ず。主義も是と同じく、一主義を以て、氣質を異にし、境遇を異にし、國體を異にする人類一般を律せむとするは、竟にこれ主義の押賣り也。世には、氣質、境遇を同じうする人も少からざれば、己れの主義、その一人のみに通用すべきものには非ず。また主義の中にも、多數に適するものもあり。小數にしか適せざるものあり。己れの信ずる主義を、世にひろめむとするは、可なれども、物品の押賣は、法律上にも禁ずる所也。主義の押賣の非なること、物品の押賣の非なるが如し。孟子の主義は、孟子もしくは孟子の如き人に適すべし。ニイチエの主

義も、ニイチエの如き天才を負うて、狂に類する人には、眞理也。世上小二イチエの徒は、之を奉じて可なるべし。之を唯一の眞理として、萬人に強むとするは、食道樂の所謂てなものを一般の食用に供せむとするの類なるべし。

人心の異なるは、その面の如し。國民としては、一致する所あるを要すれども、個人として信ずる所は、千差萬別なるが、あたり前也。食物の種類多かるべし。主義の種類も多かるべし。多ければ多き程選擇に都合好し。選擇して、好む所を取れば可也。食性の如何によりては、甘きものも酸きものも、辛きものも、餅も、酒も、一樣に好むものもあるべし。嗜好なきは即ち嗜好の大なる所以也。一の主義に偏せず、あらゆる主義に就いて選擇する人をさして、世或は無主義といふ。されど、これ眞に主義なきに非ず、主義の大なる所以也。

八 義は勇に因りて行はる

余はもと無妻主義を有したりき。わが父、肺病に死せり。我母、後家をたて、たゞ一粒種の我身を杖とも、柱とも頼みて、苦辛に苦辛を重ね、漸く貧乏世帯を維持し來りしが、余が中學を卒業したる年、父と同じく肺病にて死せり。既に父母に死に別れて、兄弟もなき孤兒の身、もしや親の病を遺傳し、もしくは傳染して、亦同じく肺病に死することあらむとは、余が平生神經を悩ます所、夜中寂寥に堪へざる時、人は之を戀とやいはむ。理想の美人を胸に描き、愚につかぬ未來の家庭を想像することなきにあらざりしも、いやいや、われ若し肺病に死せば、我妻に憂き目見せむこと、なほわが父の亡後に於ける我母の如くならむ。一生獨身にて暮さむこそ心安

義は勇に因りて行はる

義は勇に因りて行はる

けれ。これ一也。

余が性、不縦不羈、殊に冒險を好み。ゆく所にゆき、止まる所にとゞまり、興來れば、千金を一宵に散じたく、錢つくれば、一室に蟄居して晏如たり。面白しと思へば、夜を徹して書を読むこともあり、酒を飲むこともあり、旅行することもあり。かくして五十年の命を三十年に縮むるとも、思ひ放題な事して死せば、つゆ悔ゆる所なし。世の中は、太くみじかく、面白く暮さむこそよけれ。さは云へ、情にはもろき男、もし妻あり、子あらむには、ほだしとなりて、わが本性を枉げざるを得ず。これ二也。

余は讀書文章以外に藝能なし。浮世に身を立てむには、文を賣らざるを得ず。それも獨身ならば、費用少くして、従つて多く文を賣るを要せざれども、係累多くなれば、費用多くなり、従つて亦多く文を賣るの必要生ず。かゝれば、如何に文人として純潔ならむとするも、竟に文章を細工するの

職人たるを免れざらむ。これ三也。

余は以上の三理由よりして、無妻主義を有したりしが、おぞや、妻らざるを得ざりき。

われ高等學校を卒業して、大學校に學びける時、駒込のかたほとりに下宿しけるが、そこに一人の娘あり。年十七八、一目ぞつとするばかりの美人也。されど君、余は今の世の小説にありふれたるが如く、ひと目美人を見て、直ちに戀れるまでに、意志薄弱なる者には非ず。

間敷はわづか四間五つ間にて、そぎ葺きの極めて粗末なる建築、余はたゝその下宿料の安きを喜びて下宿しけるが、かゝる粗末なる下宿屋にかゝる絶世の美人あらむとは思ひかけざりき。わが禿筆は、到底其美を形容すること能はず。君よ、美と云ひ、艶と云ふも、美人をつくせるものに非ず。強ひて形容すれば、光ると云はむか。然り、光る也。かがやく也。む

義は勇に因りて行はる

さぐるしき陋屋の下宿屋も、ひとへに、ただこの美人あるが爲めに、光りか
いやくなり。

われはじめは、唯其美に打たる、より外には、何等の念もなかりしが、ふ
と思ひかへして、却つて、氣味悪く感ぜり。普通の下宿屋にあらずして、一
種の魔窟にあらずやとまで疑へり。されど余はまた思ひかへしぬ。如
何なる魔窟にもせよ、わが心だに確かならむには、毫も顧慮するを要せざ
る也。

父は風疾とて、打臥す。年五十餘、律義らしき顔付也。母は五十歳には
足らざらむ。苦勞にふけては、見ゆれど、目口そろへる顔付、娘にくらべて
は、まんざら、鶯が鷹を生みたりとも思はれず。これもちやほやお世辭言
はざるに、却つて、誠實なる心見えて、つゆいやらしき所なし。娘はかゝる
貧しき下宿屋に似氣なく、おとなしく、やさしく、上品にして、而かも寂しか

らず。えも言はれぬ愛嬌ありて、之にうち向へば、いつも春風の吹く心地
するに、われも居心よく、珍味なき食膳も、この美人の運び來れるものと思
へば、何となく、快く味はれぬ。君よ、うちあけたる話なるが、これ人情な
らずや。余はたゞ美人を美と思ひしのみ。戀しとは思はざりし也。

余が下宿しける時は、四五人の同宿人ありしが、半月ばかりたつ程に、皆
一時に立ち去りて、余一人となりぬ。なほ大風の俄になぎたる如し。何
となく心細く感じぬ。何故にかく揃ひも揃うてみな申し合せたるが如
く、一時に立ち去りしぞと主婦に問へば、ほとと打笑ひ、これには、わけこれ
有り。御詞の如く申し合せて立ち去りたる也。來りし時にも申し合せ
て來りし也。最も年とりて、口鬚あるが、壯士の親分にて、他の人はみなそ
の子分の壯士とやら、金づかひも綺麗にて、時々、の心付もありて、よきお客
様と、大事に扱ふほどに、思ひきや、娘をくれぬかとの御相談、さてはこの下

心ありてのしうちかと思へば、そら恐ろしく、その志をあだに思ふとはあらねど、壯士ときけば、何とのう、鬼に取らるゝ心地して、體裁よく斷れば、その日皆一同に立ち去られぬ。意趣がへしに、我家をこまらせむつものにや。かく一時に立ち去られて、困らぬにはあらねど、娘の身にはかへられずと云ふ。壯士のみが客に非ず。やがて素性の正しき學生來らむと慰めてやみけるが、四五日たてども、新に下宿するものはあらざりき。かゝりし程に、或る日一家俄にうちしめりたる様子なり。娘の泣聲も聞えぬ。母親の泣聲も聞えぬ。いぶかしく思ふまゝに、夕食の膳置きて去らむとする主婦に向ひて、しばし待たれよ。御家の様子たゞならず。うち明けて差支なき事ならば、伺ひたし。よそながら心配に堪へずと云へば、うれしくも問はせ給ふもの哉。そのおやさしき御言葉にあまへて何事もうちあけ申さむ。御存じのあの壯士の親分、しうねくも我家にた

り申す也。この頃媒介口ありて、先方は高等官、下女二人に書生の三人もありて、舅も姑もなし。抱へ車ありて、世に時めく御方といふに、此上もなき良縁と、うかと乗りしは、取かへしのつかぬ一生の大失策、うれしさの餘りに、精しくは詮索もせず、つまりは娘がかはいゝからの慾心づく、結納にもらひし五十兩にて、娘の着物を拵へたり、さしせまりたる借金をかへしたり、幾んどみなつかひ果したる後、よく聞けば、高等官とは、とてもつかぬ虚言例の壯士の親分が手をかへての狂言、一同たゞぎよつとして、涙の外には、よき思案も出でず。漸く媒介人にたのみて、破談を申込みたるに、さらば五十圓の結納金を、三日以内に返せ。縁談を取消さんと、は、金なしと見て取りたる上の言ひまい、五十圓をその面にうちつけてやらむものとは思へど、さてその五十圓が出來ず。御存じの如き貧乏人、親父は長の病氣、動くことも出來ず。われら女の力にては思ひもよらず。

義は勇に因りて行はる

他に相談すべき親類もなし。なまけなやうまゝとだまされて娘は終に鬼の餌となりけるなりとて、うち泣く。

當時われは修業中の身也。下らぬ人情にかかづらひて、よその疝氣を頭痛にやむことのみに損なるを知らざるに非ず。されどわが本性の情にもろきを如何せむ。僅々五十圓の金にて、人の娘の自由が束縛せらるるかと思へば、情なくもあり、馬鹿々々しくもあり、腹だだしくもあり、又何となく残念にもあり、如何にもして、五十金をこしらへて、この一家の急を救はむと決心せり。君よ、人情といふものは可笑しきもの也。この娘も醜婦ならば、又氣にくはぬ女ならば、如何に情にもろき我身とても、本氣になりて、五十圓を無理に算段せむとはせざるべきも、この絶世の美人をむざ／＼壯士輩の手に委ぬるは何となく惜しく思はれし也。さればとて、わが身がこの美人を得て、どうせうといふ野心は微塵もあらず。

二日二夜、少しも眠らず、机に對ひて筆を走らせて、百枚餘りの翻譯をなし、それにて五十圓を得て、之を主婦の手にわたすや。否や、直に蒲團をかぶりて、昏々として眠れり。余の眠のさめし時は、破談全くと、のひて、一家愁眉をひらきし時なりき。親父はおかげ様にて病氣もよくなりぬとて、床を出て。禮に來りぬ。母親はうるさきまで頭をさげて喜びぬ。娘が笑顔、日頃にもまして、夕立の空さりげなく澄める明月も管ならず、われは俄に一家の恩人として、はやされける也。されど、われは僅々五十圓の金を恩にさせるが如きさもしき心あるものには非ず。余はたゞいやがる絶世の美人を、むざ／＼と壯士が手活の花と眺むるを惜しみしのみ。支那幾多の詩人が、明妃の曲を作りしも、恐らくは、この情に外ならざりしならむ。

あなた様のやうな親切なお方が娘を貰つて下さらばと、主婦覺えず知りしならむ。

義は勇に因りて行はる

義は勇に因りて行はる

らず口走りしを、余は却つて腹だ、しく思ひき。余はそのやうに、やすつばき男にはあらざるなり。

ある夕、余はひとり道灌山頭に散歩せり。十二月のはじめ也。落葉して鹿角のむらがるが如き木立斜陽を帯び、幾羽の鳴鴉を點じて、冬のあはれをつくしたるかと思へば、滿地の麥苗はや寸を抽きて生氣の躍動するに、天地の變遷のいと面白きを覺えて、餘念なく佇立しけるに、男五六人俄に余の身にむらがり來りぬ。女を奪ひ取りたる恨思ひ知れと言ふより早く、一拳先づ余が頭に下りぬ。ふりかへれば、例の壯士の連中也。余も少しは柔術を心得居れば、二三人をなげとばしたれど、一人に多勢終に敵する能はず、ねち倒されて下駄にて蹴らるゝやら杖にてたゝかるやら、言語に絶えたる亂暴狼藉もはや、もがかむ力もつきて、このまゝ叩き殺さるゝことかと覺悟せしが、運よくも通り來かゝる人ありて、それに驚きて、壯

士等は、みなにげゆきたれば、漸く余の難は解けぬ。鮮血面をおほひ、四肢の痛さ、言はむ方なく、一步も動くこと能はず。車にのせられて、辛うじて下宿に歸り來り、これより後、數週間は病褥に臥せざるを得ざる身とはなりぬ。

主婦と娘とが本心からの看病かはるゝ徹夜までして、療治に力をつくしくれて、五週間の後に全治せり。されど、醫師の療治拙なりしにや、右の腕きかざるやうになり、筆とることも出來ず、臂を折りし塞翁の子の昔おもひ出されて、これも運也。またよき運もやまはり來らんと、心にはあきらめたれど、實際の處、不便なること言はん方なし。母も娘も、禮言ふやら、謝罪するやら、たゞ氣の毒がるに、われは却つて氣の毒なる思ひをなしたりき。

おのろけと言ひけし給ふな。君よ、詩人小説家のものする處、半以上は義は勇に因りて行はる

義は勇に因りて行はる

總ておのろけ也。余は詩人や小説家の如く婉曲におのろけを言ふ能はず。つゆちり飾りのなき處を思ひくみ給へや。さても、その後例の美人それとなく我れに意中をほのめかしかるが、われは平生の無妻主義をもち出して、これを拒みぬ。ふつゝかなるこの身も、とより御身の妻とならんと願ふにはあらず。たゞ御身の腕とならんとこそ思ひはべれ。わが爲めに二夜徹夜して筆執り給ひたるだに、一生忘れ得ざる厚恩なるに、また我が爲めに片腕を廢物にし給へり。文章にすぐれ給へる御身、如何ばかりか不自由に感じ給はん。われ筆はみゝず書きなれど、原稿の代筆ならば、ほゞ事足りぬべくや。わが一生の御願なり。妻とはおぼさず、腕とおぼして、お側におかせ給へや。この願かなはずば、生きて甲斐なし。如何はせんとてふし沈めり。

嗚呼君、われなほ之を斥けて平生の無妻主義を實行するが男子なる乎。

かゝる戀愛をも冷やかに見て、固く身を持つるが、浮世の道德なる乎。君よ、余は世間の毀譽をよそに、この女を腕とし、又妻とせり。されど、この女、余と相棲むこと、わづかに二年にして、病死せり。掌中の珠を奪はれたる心地して、もとの奎阿彌依然として、もとの無妻を守る。譬へば、鏡の如し。花來りて、花をうつし、花去りて、冷然自ら澄む。かくて、余は一生を終るべき也。

九 社會は孤立的のものにあらず

男子にも乳房あるを見れば、造物者にも、かんちがひなしとせず。神ならぬ人類の作れる社會に、無用物もしくは害毒物多きも、亦怪しむに足らず。その無用物は、茲に云はず、害毒物のおもなるものについて言はん。

社會は孤立的のものにあらず

之を社會の内容即ち思想に觀ん乎。最も害毒を流す者は個人主義也。余は幾千萬年の昔人間が利己一方の動物たりし事を否定する者に非ず。されど人は自ら社會を形作らざるを得ず。既に社會を成せる以上は、個人的性情と共に、社會的性情の發達するも、亦自然の勢也。即ち人は孤立的動物としての性情を有するのみならず、社會的動物としての性情を有す。唯その稟性に厚薄あり、故に聖人教へて曰く、君に忠なれ、親に孝なれと、而かも子を愛せよ、妻に孝なれとは教へざる也。さは云へ、千萬人中時に例外なるは、その然るべき事情ある也。必ずしも特に之を教ふるにあらざるなり。人は一面に己れを離るゝこと能はず。されど他の一面には、社會的動物たらざるを得ず。これ觀易きの理、三尺の童子もなほ之を知れるに、世の最も教育ある人にして、却つてこの軌道を逸するもの少からざるは何ぞや。曰く慾におほはるゝ也。

凡そ人として自惚なきはなけれど、才のすぐれたるもの殊に甚し。自惚は多少變形して、自信となり、我執となり、唯我獨尊となり、終に極端なる個人主義となる。これ其人の進歩上、技能上、事業上に、利益を與ふことと大なるものなれども、一方には往々社會的動物たるの域を蹂躪す。彼等は、その材能の非凡なるを自覺す。而してこれ社會の賜物たるを知らざる也。彼等才能を恃むの餘り、眼中人なし。横着となり、氣隨となり、社會の一人たるを甘んぜずして、一人の社會となさずんば止まざらむとす。彼等社會の何物なるかを解せざるにあらざるべきも、冷かなる理性の水、彼等が熱せる情慾の火を消すに由なし。餘りに己を重んじて、社會を輕視す。否己の才能の前に、社會なき也。余輩とても、弱兒や、老婆や、病者や、跛者や、列をなしてぞろゝと歩く中に、強健なる壯者のまじることとは、その人に取りてもどかしく、また苦しきことなるを知る、列外に逸出する

ことだけは許さるべからざるも、小兒をつきとばし、老人をふみ倒して、獨り進むことは許すべからず。才能あるものにして、眞に社會の何たるかを解せるものは、列外に出づることあるも、なほ列を忘れず。餘りに氣隨なるものは、列をみだしても、なほ私情の満足を圖らむとす。かくて私慾の爲めに、萬人の血を流して、氣の毒とも思はず。己れ獨り暖かに着れば、萬人凍ゆるも願みず。以爲へらく、人生の意義は、天才の事業にあり、社會の衆人は、畢竟するに、之が埋草也と。これ天才の者の主觀上、或は愉快なるべけれども、客觀的には、餘りに我儘也。かくて、道德を無視し、法律を無視し、姦淫を謳歌し、反道徳の文字を喜び、亂暴狼藉に到らざる處なからむとす。危い哉。かゝる思潮、社會にひろがらば、折角成立し來れる社會の秩序亂れて、安寧もやぶれむ、十九世紀は實に個人主義の跋扈せる時代なりしが、二十世紀の曙光を迎へんとする頃より、一方に社會主義漸く萌芽

し來れり。思ふに、二十世紀を支配すべき思潮及び事業は、それ社會主義ならむ乎。

次に社會の外形、即ち身分に觀む乎。最も害毒を流すものは、所謂富豪也。思想より云へば、個人主義、身分より云へば、富豪、これ一身同體也。即ち富豪の地位は、個人主義を實行するに、最も都合よき者也。富豪がその地位を社會の賜物に非ずと思ふの非なるは、天才がその技能を社會の賜物に非ずと思ふの非なるが如し。余輩は、一種の社會主義論者の如く、必ずしも絶對的に富豪を排斥せむとするものに非ず。されど、貧賤者益々多くなりて、富貴者益々少くなり、且つ益々大となるは、完全なる社會の發達と認むる能はず。さは云へ、余がこゝに社會の害毒物として、富豪の地位をあげたるは、必ずしも今の富貴者全體をさしたるに非ず。今の富貴者にして、行正しく、大に事業をなしつゝあるものまでも、社會の害毒物な

社會は孤立的のものにあらず

りと斷言するものに非ず。富貴の地位より起る弊害を免れざる者をさして斯く言ふ也。

社會は共棲を意味す。従つて同情を要す。然るに萬人の膏血をしぼりて己れ一人を利し萬人を雨露も凌がぬ小屋に鎖して己れは別莊を營み、あらゆる贅澤をつくし奢侈を極め財産を得る時にのみ共棲的動物となり得たる後は、孤棲的動物となりて唯私慾の満足を圖り社會に對して毫も同情なきもの、富豪に多し。これ斷じて社會に於ける害毒也。

父祖の財産に遊食して餘りあるは、或は父祖の餘蔭なるべけれども社會より見れば、徒手遊食の民也。一人前の責任を果さざるもの也。古人曰く、小人閑居して不善をなすと。遊食にして懶惰なるは、罪惡の根源也。

財産ありあまりて、身持ちのよきもの、果して幾人ある乎。妾を置かざ

るもの幾人あるか。閨房常に醜聞をもらし、家庭和せず、親子の情愛なく、友愛なく、婦人を弄び、奴隸を動物視し、もしくは器械視し、人倫をやぶり、風俗をみだし、敗徳腐行を極む。社會の害毒たらざるばあらず。

社會の上流にあるものは、社會の率先者たるべき責任を負へるに、學ばず、智をみが、ず、私慾を逞しうし、淫行を縱にして、流弊を下に及ぼす。社會の害毒と言はざるべからず。

凡そ侈奢、逸樂、遊惰、無職、座食、姦淫等、社會の罪惡の源となるものは、大抵富貴の地位より醸し出す所也。世の罪惡の鎗玉にあげらるゝものは、多く貧賤者なれども、その源は、富豪ひとり利を占めて、而も流弊を傳ふるに在る也。

人はみな社會に對して責任あり。上流にある者は責任殊に大也。徒に守錢奴となるべからず、座食者となるべからず、閑居して不善をなすも

社會は孤立的のものにあらず

のとなるべからず。その財産を得たるは、その人、もしくははその人の父祖の力なるも、實は社會のお蔭也。それ相當に力を以て、もしくはは財産を以て、社會につくさざるべからず。上流の責任として、品位をよくせざるべからず。學問智識なかるべからず、慈善事業、公共事業、教育事業、學問、藝術など、協力もしくはは保護を要する社會の善事には、殊に盡力せざるべからず。之を保護せざるべからず。わけて品行をつゝしまさるべからず。かくの如くにして、始めて害毒物、即ち個人主義の具體たるの實を減ずるに庶幾からむ乎。

十 制裁力を振起すべし

世の所謂紳士なるもの、志士なるもの、政治家なるもの、實業家なるもの、

即ち社會に浮動するもの、敗徳汚行、比々として皆是なるは、正人君子の慨歎して措かざる所之を匡正するの策なきにはあらずといへども、彼等譬へば猶古幹老枝の如し。習慣既に性となり、牢としてまた抜くべからず、其短きを延ばし、曲れるを矯むるは、老巧なる橐駝といへども、猶ほ且つ難しとする所、寧ろ老を棄て、新たに就くの優れるに如かず。蓋し少年子弟は人生の花なり。社會の嫩葉なり。左すべく右すべきものは、獨り岐路のみにあらず。黄すべく黒すべきものも、亦獨り練絲のみとなす。天に冲するも、地に偃するも、直となるも、曲となるも、一に少年の覺悟如何にあらんとす。國家を憂ふるもの安んぞ少年の前途に泣かざるを得んや。

吾人曾て代言試験に受験者の寫真を用ゆるを聞けり。又海軍兵學校にも、陸軍士官學校にも、陸軍幼年學校にも、同じく受験者の寫真を用ゆる

制裁力を振起すべし

を聞く。學徒たるもの、敗徳汚行一に此に至りたるかと思へば、吾人實に長大息に堪へず。受験者の寫真何が故にか之を用ゆる曰く、代人を出さんとするの弊を防がんと欲すれば也。代人何が故にか之を出す。曰く、自家の力の足らざる所を補ひて、合格を僥倖せんと欲すれば也。嗚呼、吾人之を何とかいはむ。もと試験なるものは、必ずしも其人の才能を知り得べきものにあらず。世人もし席順の上下を以て、直に勢力の優劣を判ずるの尺度となすものあらば、吾人實にその愚を笑はざるを得ず。もしまた眞面目になつて、單に試験の爲めに勉強するものあるも、吾人はなほ其愚を笑はんとす。代人を用ゆるに至つては、卑屈とも、陋醜とも、破廉恥とも、吾人ほとんど加ふべきの言を知らず。

吾人敢て必ずしも世の紳士を尤めざるが如く、また必ずしも代言の試験を受くるものを尤めず。何となれば、彼等は既に半ば紳士となりたれ

ば也。海陸諸學校の受験者は則ち然らず。彼等は實に純然たる書生なり。花は櫻木、人は武士、武士の遺風、今や唯軍人社會に於て之を見るべきのみ。世人争ふて利に就くも、獨り軍人は出て、汗馬に鞭ち入て、濁醜に酔ふの外、また求むる所なし。世人競ふて權を求むるも、獨り軍人は鞠躬盡力、屍を馬革に裹むよりは、他の願なし。忝なくも、天皇陛下直率の下に立ち、國家の干城を以て自ら任じ、清廉眞摯、威有て猛からず、勇壯義烈、嚴にして暴ならず。氣節を尙ひ、信義を重んじ、言ふ所爲す所、一として至誠に出でざるはなく、既に賄賂の何物たるを知らず、亦何ぞ阿諛を解せんや。澆季浮薄の社會、唯口有て腸なき五月鯉的の俗人の間に、軍人の介するは、なほ波濤風雨の中に、巨巖の屹立するが如し。文臣錢を愛しまざることは、期すべからず、武臣にして死を愛しまざる限りは、吾人枕を高ふして臥するを得む。あはれ、彼等軍人は、事あるの日は、身を擲て國家を

守護し、事なき時には氣を養うて、風紀を維持するに足る。學識の有無、必ずしも之を問はざるも、彼の萬卷の書を読み破りながら、毫も國家の大義を辨ぜず、徒に閑舌を揮ひ、秃筆を弄びて、反つて害毒を流す俗儒の輩に比すれば、その天下を益するの大小、智者を待つて而して知らざる也。

吾人は今の軍人の随分腐敗せるを知る。然れども他の社會に比すれば、軍人社會は腐つても鯛の骨の感あり。軍人は既に純正を以て立つべき筈のものなり。將來軍人たらしむとする者も、亦純正ならざるべからざるは言を待たず。滔々たる社會の弊風、他の學生社會に進入するも、少くとも軍人志願の書生社會は、之が進入を防がざるべからず。今日試験に代人を用ゐむとするの書生が、他日能く亂軍危急の際に在つて、從容死を致すの烈士夫とならむことは、吾人到底之を希望すること能はず。否、吾人はその戰爭にも代人を出さむことを恐るゝなり。且つ海陸軍を志願

するものは、いづれも弱冠前後の青年なり。代言の試験を受けむとするもの、如くすれかすれたるにはあらず。殊に幼年學校入學の如きは、滿十五歳より滿十八歳までの限りなれば、何れも紅顏の少年たらずんば、あらず、盈々たる玉頬、或は接吻の榮を得れば足る。宛轉たる清喉、誰か呻語の聲を共にするを希はざらんや。然るに河ぞ圖らむ、聞くも穢らはしき悪計を巧まむとは。思へば、外面如菩薩、内心如夜叉とは、獨り妖婦毒婦にのみ用ゆべき言葉にはあらざる也。

軍人志願者の中、現に代人を用ゐたる者ありしか、吾人は之を知らず、單に當局者の豫防に出でたるか、吾人また之を知らずと雖も、形なくして影のあるなし。吾人は試験に寫真を用ゆるは、學徒社會の一大恥辱たるを信じ、當局者をして寫真を用ゆるに至らしめたるものは、學生の腐敗、その極に達したるもの、一證たるを信じて疑はず。思ふに、山村幽谷の間に

浩然の氣を養ひ得て苦學するものは、未だ社會の惡風に染まざるべきも、一たび笈を都會の地に負ふに及んでは、心神自ら浮き立ちて、遊蕩三昧に日を暮し、一も得る所なくして空しく故郷に歸るもの少からず。偶々學問に志す者あるも、優柔無氣力に陥り、誇張虚飾をつとめ、頭に香水を匂はせ、胸に時計の鎖を輝かし、徒に紳士の様を學び、空しく兒女の憐を求めつ、交を論ずれば、豪傑の士に接するを願はずして、必ず男女交際と云ひ事を論ずれば、天下の大勢に及ばずして、常に巷間の痴話に止まる。未だ老親の厄介を免れざるも、早く服装の美を誇り、腹なほ枵なるも、巧に辯舌を揮ふて、先哲の受責をなす。都々一を謠ふには、巧なれども、腕力なければ、脚力もなす。カッポレを躍るには、妙なれども、角觥をなすの術を知らず。出づるや、必ず車に乗り、食するや、必ず肉を選ぶ。腕力なければ、脚力もなす。膽力なければ、眼力もなし。唯試験を胡魔化して、虚名を釣り、愚人を

籠絡して不義の利を貪らむとす。故に交を結ぶには、酒食を以てし、信義を以てせず。朝に刎頸の交をなすも、夕には仇敵の思をなし、桂林莊の和諧だに既に求むる能はず。管鮑貧時の交に至つては、之を視る事、士芥も管ならず。信義ある者呼んで馬鹿正直となし、慷慨義に勇むものを目して粗暴となし、輕薄を才子の本領と心得、諂諛を處世の秘訣と信じ、天下の大計、國家前途などは、恬として之を顧みず。志す所は一に一身の利害にあり。自校の教師若し他の學校に出づれば、忽ち角を生じて不平を唱ふ。何ぞ其嫉妬深き賤婦に似たるや、たま／＼少し活潑にして、運動を好むものあるも、殊更に春風駘蕩、士女山を爲すの候を選んで、墨田川に競漕を催し、飛鳥山に運動會を開き、以て兒女の喝采を博し、以て都人の娛樂に供ふ。彼の優伶藝人の徒と何ぞ選ばむ。運動といへども、角力の如き、旗奪の如き、活潑壯烈なるものは、之をなさずして、腕力を要せず、腕

力をも要せざる高飛棒飛競走などに重きを置き巧を競ひ技を弄ぶさ
ま、輕業師に異ならず。而して輕骨細脚の徒多くは勝を制す。そのしか
うには種々の文彩を施し其半ツポンは美麗なる絹布を用ゐる光彩目を射
看者を喜ばせて以て得たりとなす。恰も楊花が盛愴妖飾笑を呈して見
臺を擁するに似たり。學生真摯の風は果して何の處にかある。海國の
民にして、ポートを漕ぐは固より有益ならん。然れども其真正の目的を
忘れて、徒に賞品を欲するに至りては醜陋汚穢といはざるを得ず。唯
其れ立派なる賞品を設けんと欲す故に隨つて多くの黄金を要す。之を
會費に求めて足らず之を同學の寄附金に求めて足らず之を教員職員
寄附金に求めて足らず。是に於て平生愛顧する諸商店に到り唱へ
て曰く、今般我校に於て大運動會を催し、廣く寄附金を募る、汝の商店、我
生徒の庇蔭を被ること多し。宜しく此時に際して相應の寄附をなすべ

し。然らずんば以後申し合せて、我校生徒は一人も汝の店頭へは來らざ
るべしと。店主恐惶出づる所を知らず、頭を掻きながら囊底を叩き、衣
ものも衣、食ふものも喰はず、丹誠辛苦して貯へたる臍線金を出し、以て
漸く一時苟偷す。洋服屋先づ之を始め、靴屋之に次ぎ、書籍店之に次ぎ、牛
肉店之に次ぎ、唐物店之に次ぎ、洋酒屋之に次ぎ、パン屋之に次ぎ、蕎麥屋之
に次ぎ、以て焼芋屋に及ぶ。此に至つて黄金雨下し、賞品山積す。委員見
て莞爾たり。會員望んで欣然たり。嗚呼一朝遊戯の爲に幾百人の膏血
を絞り、窮民を泣かして己れは揚々乎として、賞牌を胸にす。咄々書生
の面目果して此の如きもの乎。

東都書生の多き十萬人にして足らず。學問に秀でて才操に富む者も、ま
た鮮からざるべし。然れども資金少しく饒にして優柔なるものは、忽ち
貴公子的の人物となり、貧にして氣を負ふ者は、誤つて壯士と化し去る。

眞に學に觸み、氣節を重んじ、牢志堅操、能く天下後世を憂ふる團體にいたりては、それ果して幾何かある。聞くならく曩の戦争に、眞に力量あり、勇氣ありて、よく戦争につくしたる士卒は、士族にあらずして、農民なりきと。嗚呼、武士の子弟も、今や此までに墮落したる乎。固より讀書に耽るものは、筋骨の力の減ずることは、敢て怪しむに足らざれども、志氣節義までも一丁字なき士百姓に劣るにいたりては、それ之を何とか云はむ。思ふに團結の事を圖るに便なるや久し。風紀に對する重なる勢力は、一に社會の制裁如何にあらんとす。一本の喬杉、以て大風に抗し、難きも、千株の竹林の風に折れたる例を聞かず。今日滔々たる社會表面の弊風を防がんとせば、書生互に相結んで之に當るの便なるを信ずるなり。十五六歳の少年、獨り不知案内の帝都に來りて、亂雜を極むる、下宿屋に入る、これ羊兒を抱いて、虎狼の群に投ずると何ぞ異ならずや。蓋し傳染病毒は、多く瀧

濁溝泥の中より起り、書生の弊風は、おもに下宿屋の樓上より發す。下宿屋は實に書生の自由國なり、安樂土なり、晏起するも咎むる人なし、他宿するも、唯下女に嬲らるゝのみにして止む。三度の食事、唯坐して之を辨ずべく、茶を點じ、酒を飲み、菓子を食べ、牛肉を味はんと欲するも、唯一拍手にして事足れり。一室を取り切つて己の城郭となし、如何なるものを引き入るゝも、勝手次第也。食物少しく悪ければ、直に他の下宿屋に轉ず。恰も牧民が水草を趁ふて移るが如し。一室五六疊、一隅多くは一脚のテールと一脚の椅子とを置く、金鏤の洋籍机上に行列し、日刊の新聞時に机下に翻る。中央に毛氈を敷き、火鉢を置き、急須を備へ、椅子に凭り掛つて、楣間の美人畫を眺め、部屋一杯に匂ひ溢るゝばかりのシガレットをくゆらし、思ふが如く、思はざるが如く、茫然として手を組めるは、此城郭の主人也。西の隣室、忽ち吟詩の聲を起すを聞く、呻るが如く、吠ゆるが如く、泣